

6月



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
6月号
No.600

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





路地 へ表紙の花▽ 櫻子

「路地を通ってくる間に気持ち切り替わります」とお弟子さんによく云われる。三十餘の石畳に水を打ってお迎えをするのだが、そのご褒美に爽やかな風が吹き抜けて行く。水まきは迎える側も心地よい。

花材 七竈(薔薇科)

芍薬(牡丹科)

花器 陶花器(清水美菜子作)

掛け花 へ2頁の花▽ 仙溪

アスチルベの和名は升麻、泡盛草。この仲間は東アジアと北アメリカに分布し、日本にも泡盛升麻が自生する。泡のような可愛らしい花である。

玄関の掛け花は季節の花を小さくいけている。前へ低く出すのがポイント。写真はあえて横から写した。

花材 ベル鉄線(金鳳花科)

アスチルベ(雪の下科)

花器 陶花器(清水美菜子作)

玄関花 へ3頁の花▽ 櫻子

ビバーナム・スノーボールは和名を西洋手鞠肝木という。ビバーナムは忍冬科・菘菜属の総称である。

玄関の間には少し大きめの花をいけている。この朱塗りの円卓は、季節を感じつつ華やいだ雰囲気の花が似合う。

花材 カラー四種(里芋科)

スノーボール(忍冬科)

花器 カットガラス花器



テキスト六〇〇号

「桑原専慶流いけばなテキスト」第一号は一九六二年十月に発行され、今回で六〇〇号になる。十二ヶ月で割ると五〇年だが、都合により発行できなかった月があるので五十二年目。表紙の「テキスト」の題字は日本画家の由里本出氏ゆりもと いずるの字である。祖父から父と母へ、父と母から私と櫻子へ引き継いできた。

祖父の「テキスト」はその内容も変幻自在で、花道の心得を丁寧な解説し、いけばなにまつわるあらゆることをなんとか伝えるための様々な工夫がなされている。丁度「いけばなの四季」という花道入門書の出版と同時に進行で内容の充実が腐心されていたのだと思う。ときにはまだ小さかった櫻子の墨絵もカット画に使ってあつて楽しい。

父と母の「テキスト」は二人がそれぞれに花をいけ、文章はすべて父が書いていた。母はいつも次のテキストでいける花を考えていたし、父の文章には父の哲学が込められている。それらの一部は「ホッホチャンとケンチャン」「富春軒三代」そして「仙齋彩蔵」という本になった。

今は私たちの番である。写真では伝わらない立体感をどのように伝えるか。いけばなのいけ方だけでなく、その周辺の知っておくべきことも加えて、いけばなの普及を見据えた内容を。など、やりたいことは多い。今後共応援をお願いします。



花菖蒲

花型 行型 五花九葉

花器 陶水盤(竹内眞三郎作)

花菖蒲の見頃は六月前半から中旬
 だろう。端午の節句の頃はまた本
 来の時季ではないので、早咲き品種
 のみが出まわるが、花菖蒲の品種は
 現存するもので二千種といわれてい
 る。とてつもなく多くの品種がつく
 られてきたわけだ。日本全国に約
 二百の花菖蒲園があるそうなので、
 季節には花見にでかけた。

東京の明治神宮(百五十種)、大
 阪の城北公園(二百五十種)には行っ
 たことがあるが、それぞれに心に残
 るものがあった。

さて、古典いけばなでは葉組とい
 うものがあり、花菖蒲は葉株をいつ
 たんはずしてから重ね合わせて美し
 い姿に形作る。最初はなかなか葉が
 くっつかないが、稽古を重ねるとこ
 っがかめるようになる。

うまく葉組ができるようになってくると、葉がのびてゆく過程に思い
 を馳せる余裕もできる。外側の短い
 葉を親葉と呼ぶが、この短い葉が最
 初に生まれてそこから次の葉が伸
 び、順々に中から生まれた葉が前の
 葉を追い抜いて高く伸びていく。つ
 まり順に支えあいながらどんどん背
 をのびすのだ。そして葉先は互いに
 向き合っている。なんだかとても素
 敵な関係だと思いませんか。植物の
 「出生」には植物の生き様が見える。

ビッグイシュー日本版
「生き残りのしくみ」
春、植物の生き方に学ぶ

月に二回、京都の三条大橋東詰で「ビッグイシュー日本版」を買ったのを楽しみにしている。「ビッグイシュー」は書店ではなく路上の販売員さんから買う。ホームレスの自立支援のために一九九一年にイギリスで発行が始まったもので、代金の半額強が販売員の収入になる。日本でも二〇〇三年から発行されている。

もちろん支援の気持ちもあるが、自身がいいのも購入理由の一つだ。経済学者の浜矩子氏と作家の雨宮処凛氏のコラムが好きだ。映画俳優のインタビュもかなり踏み込んだ内容。そして特集記事の中には今の時代と向き合う内容のものが多く。

四月一日号の特集は表題のような植物にまつわるあれこれ、大変興味深かったので一部をここで紹介しておきたい。

まずはじめに生物学者の田中修氏（甲南大学理工学部教授）からのメッセージを。

「植物たちは、いつでも、どこにでもあります。でも、見飽きるということはありません。何も悪いことはないし、嫌なことも言いません。その上、ときどきして、喜びや感動を与えてくれます。」

「そんな植物たちは、私たちと

同じ生き物であり、同じしくみで生き、同じ悩みをもち、その悩みを解くために毎日がんばって努力しているのです。」

「植物たちは、その祖先が海から上陸して以来、約四億年間を生き抜いてきています。生きるために巧みなしくみを工夫し、不都合な環境に耐え、逆境をはね返してきました。」

「ですから、その生き方には、私たちが励まし勇気づけられることや、慰め癒されることや、新しい意欲を掻き立てられることなどが多くあるはずですよ。」

ワクワクするメッセージではないか。内容は次の六つの章に分かれている。

一章 「自力で生きられる植物。そしてすべての動物を養う」

二章 「病気への生き残り戦略。多様な子孫を残すこと。」

三章 「毒による護身術」 体内に独自の毒をもつ植物たち

四章 「太陽の光とたたかう」アントシアニンとカロテンで装

五章 「逆境を生きのびる術」変幻自在、たくましい植物の生き方

六章 「命を次代につなぐ多様な工夫」 タネ、自家受精、ハカラム、地下茎

では一章から順に内容の一部を紹介したい。

自力で生きられる植物。そしてすべての動物を養う

四十億年前、地球上の最初の生命は、海の中に何億年もかかって貯められていったスープのような栄養物を食べて生きていた、つまり動物的な生き方をしていた。

ところがやがて栄養物は食べつくされて生命が絶滅の危機に瀕した時に、それを救ったのが植物の祖先だった。食糧がないのなら自分でつくろう、という植物的な生き方が出てきたのだ。

その後、海の中の一番上層にいた緑藻類が波で打ち上げられて、陸上で生活をはじめたのが約四億年前で、動物もそれを追って約三億年前に陸にあがってきた。

植物たちは根から吸った水と空気中の二酸化炭素を材料に、太陽の光を使って自分の葉っぱでブドウ糖やデンプンをつくる。そして窒素という養分を地中から取り込んでアミノ酸をつくり、それを組み合わせて自分に必要なタンパク質、脂肪、ビタミンなどもつくることができる。一歩も動かずして、自分自身で必要な栄養をすべてつくり出す能力を備えているのだ。

このようなことは私たち動物から見れば魔法のようなことである。

(次号でも続けて紹介します)

花菖蒲 五花九葉



花の位置や葉組の形は一例であり、必ずこのようにするというものではない。作例では花を高いところだけに使い印象的な花型にした。

真



内副



真副



副



胴



留



留の沈み

控



副の沈み



NIHONJIN NO WASUREMONO

日本人の



れもの

44

第2部 忘 || 華森清範 清水寺貫主

いけばなの心

結婚を決めた相手は、江戸時代から続く花道家元の娘であった。それが私がいけばなを習うきっかけとなり、心の中の美を形にする父と、おおらかに花と向き合う母と、もてなしの気持ちで伝える妻とともに、花の道を歩んできた。

いけばなとは。シンブルに言えば、地に根を張って立つ木や草花から一部を切り取って水を入れた器にいけることなのだ、それらが「いい表情を見せてくれる」には、それなりの経験の



桑原仙溪

桑原専慶流家元

成すべきことを

真剣に考え、

変えるべきことは

しかし、その半

面もつと気楽に、身近に花をいけてほしいとも強く願う。心のこもったいけばなは、人の心を和ませる。花がいてであると自分もまわりの人もほつとする。部屋の空気ががらりと変わる。そんないけばなの力を知ってほしいし、もっと暮らしに活用してほしい。

私が花をいけるとき「自然の息吹を敬う」気持ちを大事にしている。



花に新たな命を吹き込み「生かす」ことを考え、構想する家元。 (2011年11月/流展)

ドイツ・テテロー市775年記念祭典にて花をいける家元と桑原櫻子副家元。(2010年5月/聖ペテロ・パウロ教会)

いけばなである。

花の茎を水の中で切ると、ぐぐつと水を吸い上げる。葉に霧を吹いて手で広げるとしゃんとする。束をほどいて枝を本来の姿にもどすと気持ちがいい。若松の幹を手で磨き古い葉を取り去ると輝いてくる。「生かす」ために花や木に触れるうちに自然と心を通わせているのに気付く。いけばなを習って良かったと思う瞬間である。花を習っていないかと思ったら、松の枯葉を掃除したあとの清々しさを味わうこともなかっただろう。

私たちは自然に生かされ、豊かな心を養ってきた

いけばなに限らず、多くの芸術・文化は自然との関わりの中で生まれ育ま

変える時がきている。

積み重ねが必要となる。ところが一年に一度しかいけられないような花材もあるうえに、何十何百という種類の植物を相手にするので生涯修業は続く。また花材のとり合わせ、花器の選択によって良くも悪くもなるので、自分自身の美の感覚を磨くことも大切。古典様式の「立花」には九つの役枝が

あつて立てるのに一日かかったりする。花道は奥が深い。

もつと気楽に身近に花をいけてほしい

生き生きとした花や味わい深い枝は、大地・風雨・太陽が育み、そこに人の手が加わって私たちの手元に届く。虫や鳥も関わっている。そんな花に、新たな命を吹き込んで「生かす」のがい



古典様式の「立花」には九つの役枝がある。松一色立花／桑原仙溪 写真＝宇佐美宏

れてきた。私たちは自然に生かされ、豊かな心を養ってきたのだ。自然の恵みを受けて生かされていることに感謝し、先人が培ってきた自然との関わり方を「学び磨いて生かし伝える」ことが大事だと思う。

2年前の大震災で、自分の成すべきことを、あらためて考えた人は多かった。福島原発事故によって原子力の恐ろしさに気付いた人も多かったはずである。安易に電氣を得る代償に美しい豊かな自然との関わりが断ち切られてしまったのだ。放射能による内部被曝はこれからどんな影響を及ぼすか知れない。放射性廃棄物の処理もままならない。このことに私たちはもつと絶望すべきだ。そして、成すべきことを真剣に考え、変えるべきことは変える時がきている。子どもたちの未来のために。人も含めた美しい自然を損なわないために。

●くわはらせんけい
1961年、大阪市生まれ。80年、桑原専慶流に入門。84年、同志社大工学部卒業。同年、同流14世家元長女櫻子と結婚、家元を補佐しながら教授活動を開始。2004年、15世家元襲名。日本いけばな芸術協会理事、京都いけばな協会副会長。

京都新聞 4月28日(日)に掲載された『日本人の忘れもの』第2部44の紙面より転載。(カラー一面)



富士山 〆9頁の花〆 仙溪

この花器の銘は「タワー」で、私が勝手に富士山の花器と呼んでいる。この花をいけた数日後、富士山が世界文化遺産に登録されると、ニュースが流れたのは偶然である。冠雪も溶けゆく六月の小品。

花材 猿捕茨(さいせいのいばら) (百合科)

鉄線二種(てつせん) (金鳳花科)

花器 陶細口花器(たわこまぐち) (竹内眞三郎作)



白の上

△10頁の花▽ 仙溪

4頁と9頁は二階の稽古場の板床と縁側である。普段は稽古の見本を飾ったりしているが、神聖な稽古場なので少し緊張して見て頂いていることと思う。稽古場は花道の道場だ。稽古を終えて一階へ下りると少しほっとされるだろう。そんな時は家の花をゆっくり見て帰ってほしい。10頁のように玄関の白の上にも時々花をいけている。いつもは写真の左側が正面になるようにいけているが、ここにいける花は後ろ側にも気を遣う。まわりの空間に呼応するようにながけていける。

花材 黄素馨 (木犀科)

百合「スイートメモリー」

(百合科)

撫子 (撫子科)

花器 青白磁花器 (宮永東山作)

庭のテーブル

△11頁の花▽ 櫻子

父と母は玄関前のこの空間で時々朝ご飯を食べていた。たっぷりの紅茶とイギリスパン。表通りから深く入っているので閑かなのだ。庭の花の蜜や虫を食べる鳥たちもよくやっ



てくる。草むらの中はレモンちゃんの昼寝場所にもなっている。レモンちゃんは昨夏から居る猫である。前のゴンちゃんはシャイな猫だったが、レモンちゃんは人なつこい。たまに稽古場にやってくるのをどうしたものか思案中。

以前のテキストでも甥っ子たちの作った猫と一緒にこの場所で薔薇をいけたことがある。花は折々の記憶を色彩豊かにしてくれる。

花材 薔薇(薔薇科)

紫陽花(紫陽花科)

花器 ガラス花器(クリシー製)

水を感じる

△12頁の花▽ 櫻子

たとえ水が見えなくても、いけばなの水はとても大切である。花にしてみれば、いつもきれいな水を吸っていたいにきまっている。花の水をいつもきれいにしている人には、いい花がいけられる。それは花の気持ちになれるから。それはもてなしの気持ちを持っているから。

美しい水を感じる花がいけられるようになろう。

花材 バンダ二種(蘭科)

レースフラワー(芹科)

花器 彩泥玉型花器(宮下善爾作)



これからのいけばな

京都新聞「日本人の忘れもの」にも書いたことだが、自然の恵みを受けて生かされていることに感謝し、先人が培ってきた自然との関わり方を「学び磨いて生かし伝える」ことの大切さを痛感している。私達は自然に生かされて豊かな心を養ってきたのだ。

私が小さい頃のおじいちゃん、おばあちゃん、自然との関わり方を沢山知っていた。今でも友人の中には子供と一緒に山菜を摘んで食べる楽しみを知っていたり、草で笛を器用に作れたりするのがいるが、そういう経験こそ豊かなことだと思っ

た。ある小学校では校長先生自ら校庭にできた実をもらって食べ、子供達がこっそり真似をするようになっていく。随分植物への関心が高くなってきたそうだ。素敵な校長先生である。

植物の中には毒をもつものもあるので関わり方を間違えとひどい目に遭うが、昔からの自然との関わり方には知恵がいっぱいつまっています。食べることを、遊ぶことを、薬にすることを、ものをつくることを、芸術を生み出すこと、そしていけること。

いけばなは植物との関わりを深めるだけでなく、いける喜びやもてなす楽しみがある。いいいけばなは心地よい「和」を生んでくれる。人と人との心をつないでくれる。そういうこともいけばなの大切な役割だと思っ

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014 年
6 月号
No.612

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





出合い花 (9)

△表紙の花▽

仙溪

花菖蒲

はなしょうぶ

紫陽花

あじさい

檜の穂先のような蕾が、ゆっくりとほころび、羽をひろげるように花が開いた。花をいける楽しみは、そんな瞬間にある。

白い花菖蒲のとなりには、外国育ちの赤みの強い紫陽花が、水をふくんで咲いている。紫陽花に花菖蒲一見普通の組みあわせだが、とっておきの器にシンプルに出合わせると、眩しく輝きました。いけばなは面白い。もの云わぬ花が、周囲に生のエネルギーを放つ。たった一本と一輪の出合いなのに。

花材 花菖蒲 (菖蒲科)

紫陽花 (紫陽花科)

花器 金彩ガラス花器

(ウルリカ・ハリーン作)

太藪 芍薬

△2頁の花▽

仙溪

花型 株分け生花

主株 太藪 (蚊帳吊草科)

子株 撫子 (撫子科)

花器 青磁水盤

太藪の細い線が揃うことで生まれる造形美は、他のものではつくることができない。太藪の生花で気を遣うのは、どこから見ても茎の線が交



又しないようにすること。太藪だけでは地味なので、季節の花と株分けにすることが多い。撫子を子株にかけた。

右の写真の子株は「剣山の粧」という芍薬で、葉が小さく締まっけて子株に丁度いい。蕾は小さいが、咲くと大きな玉状になる。

床の間に花菖蒲の軸を掛けて飾った。花の絵の軸を掛けて花をいけることはあまりないが、水ものの太藪と陸ものの芍薬に、水辺の花菖蒲が加わると趣が増す。

七竈 鉄線

△3頁の花▽ 仙溪

花型 二瓶飾り

主瓶 七竈ななかまど（薔薇科）

副瓶 鉄線てつせん（金鳳花科）

花器 染付花瓶（加藤巖作）

三つ足水盤

鉄線の生花には支柱がわりの枝が要る。七竈をいけたあとの残り枝を使った。鉄線は足元をよく解ほどしておく。





花菖蒲二種

△ 4頁の花▽

仙溪

花菖蒲の開花は六月、北海道から九州まで、全国各地の花菖蒲園で色とりどりの花を水辺で咲かせる。江戸時代から品種が増えて、現在では二千種もあるそうだ。葉とともに勢いよくいけたい。

花材 花菖蒲二種（菖蒲科）

ライラック（木犀科）

花器 方形金三日月文花器

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ②

「立華時勢粧」は次のような構成になっている。

「立花時勢粧 上・中・下」 (3冊)

「立花秘伝抄 一〜五」 (5冊)

「立花時勢粧 上・中・下」には118の立花図が収められ、花形真行草の説明が添えられている。

「立花秘伝抄 一・二・三」は立花に使われる花材解説だが、立花での扱いが詳しく述べられている。

「立花秘伝抄 四・五」は立花の基本や心得など、最も大切なことから詳しく書かれている。

ではまず「立花時勢粧 上」より「立華時勢粧序」「真行草の図」「除心真行草の事」「砂物真行草の事」に書かれていることを紹介する。(文中の句読点は、読みやすいように筆者が加えた。)

立花時勢粧 上

立華時勢粧序

およそ瓶に花を立て楽しみとなすわざ、もろこしにもありと聞けど、法を定め掟を守りて指す事なし。和朝には昔日 この道に長じ、

東山音羽の桜に苔むしをそがせ、西谷や高雄の紅葉には晒木さらを削らせ、あるは小しだのみどり

を夏ばせに映し、あるはかるかやのおぼつかなく水仙のざれたるもおかしく、おのれおのれが出生直ちにかんがみ、うつり行く自然の気色けしきを瓶にうつして、翫もてあそびたまいしより、代々の樂となりたり。その風景のたえなるにいたりては、春の山の笑る顔えめかほせこほに詞の花のことぶきを立て、あるじの目をよろこばせ、秋の山の愁うれえたる形に、



第一図

立花 松直真

真の花形

松竹梅 檜 栢 伊吹 水仙

熊笹 ひさかき 枇杷

なき人の作善を追うて仏の道うとからず。されば瓶上に南山の美をつくし、砂鉢に西湖の風色をうつす。ちからをいれずして高き峰、深き溪を小床に縮む。至らずして千里の外の勝景をみるごと、その術諸芸の及ぶところにあらず。いでやこの道に名ある人。くれ竹のよよに絶えず、松が枝のおりおりに出て、形体めづらなる風俗を立て初めしより、瓶の下水を味ふるもの数多になりきて、予も又花に遊ぶこと久しく。且つはたつきなき山路にたどり、かつはしるべなき野辺に迷い、好めるを友とし、優るを師として、多問多聞を恥じず。それよりこのかた諸師の秘伝と諸書奥義と、鍛錬つくして、新たに風体を指し出せり。然れども古法の格式草木の出生、もとより背くことなし。今ここに凶する所の百二十瓶四時の景物に随いて、会をなし、諸人庭に沓いれし席の花形なり。これ人の目だつべき色もなく、心とむべきふしも侍らねど、よしや笑草。四方にはびこり、根さしのかれぬよすがともならなむかしと、名付くるに時勢粧の字を仮り用いるものなり。

貞享五年弥生日

真行草の図

儒書に云う、真は人の正しく立つが如く、行は人の行くが如く、草は人の走るが如し。立花なおその意義をもつてこれを名るもの乎。

瓶に花を立るに真行草の三つあり。古書に序発急の花といえり。古人松を切り花を折つて瓶



第二図
立花 松除真

行の花形
松 柳 梅 栢 植 伊吹 椿 熊笹
枇杷 檜 小柏 嫩

にむかうより、まず真の花形をあらわし、それより真を行にやつし、行より草の花形を出して、七つの枝を定め、またそのほか数多あまたのならいを立つ。万木千草しゆっしやうの出生をかんがみ、一草一木に立様あることを伝え、野山水辺おのづからなる景気けいきを居所きょしょに写して楽とす。今ここに三瓶を図して初学おしなの教とす。立様口伝外りにしるすものなり。

真の花形 (第一図)

行の花形 (第二図)

草の花形 (第三図)

右真行草の三瓶、古人の法式を守り、代々指し来る所に、中頃名師鍛錬工夫の妙用よりその一を又三つにわけて、真に三品、行に三品、草に三品、九品の花形を出す。然れども秘しかして代に伝えず。まれに相伝する人ありて真を立れども行を立る事かたく、行を指せども草の花形指こと難し。まして九品の花形ことごとく得る人はなかるべし。されば古人のいわく、ある時の花形は如来のごとく、菩薩のごとく、金剛力士のごとくなるべしといえり。花道のみにかぎり

ず、諸道諸芸もかくぞ有るべき。伝え聞く、高野大師は筆の道に通達ましまして、皮肉骨の三筆をふるい給いしによりて、和国第一の筆妙なりと云えり。立花真行草も又かわる所あるまじや。今ここに図する所の九品の花形、秘伝たりといえども世にひろむるものなり。立様口伝外にしるしぬ。



※参考文献
『いけばな美術名作集 第三卷 立華時勢粧』(日本華道社刊)
『花道古書集成 第一期第一卷』(大日本華道界刊 思文閣出版刊)

第三図

一株砂物 松真

草の花形

松 蔓梅擬 伊吹 晒 柘植 嫩 檉木 熊笹 菊



【テキスト611号 訂正】

(5ページ1段25行目)

除心真行草の事

除心立の内真の花形(二図)

同行の花形 請上り立(二図)

カラーとアジサイ

△9頁の花▽ 櫻子

花材 カラー(オレンジ、黄色)

紫陽花(紫色、白色)

花器 カットガラス花器





初夏の山

△10頁の花▽

櫻子

花材

裏白の木 (薔薇科)

スイートメモリー (百合科)

撫子 (撫子科)

花器

染付花器

いばら二種

△11頁の花▽

櫻子

花材

難波次 (薔薇科)

浜加子 (薔薇科)

アスチルベ (雪の下科)

花器

ガラス花瓶



最近の趣味は虫捕りだそうです。



芦屋の花屋さん 櫻子

JR芦屋駅の近くに、芦屋マダム御用達の素敵な花屋さんがある。三ヶ月に一度はこちらの歯医者さんに通っているの、この花屋さんに立ち寄るのを楽しみにしている。

小さなお店に所狭しと枝もの、花、観葉植物が置かれているのだが、買うよりも何時までも眺めていたいお店なのだ。

店内の中央には白くピンクく紫色にかけての花が盛るように配置され、裏に回ると黄色からオレンジの花が鮮やかに飾られている。大きな枝はそれらの花々の上で広がり、窮屈に括られていない。

綺麗に見えるコツとセンスが有るのだと思う。

観葉植物や多肉植物なども数は少ないが、見たこともない様な珍しい物が多い。それら全てが鉢のまま売られている。ベルギーやフランスの焼きものに入られている。

今日はユーフォルビア・オンコクラータというトウダイグサ科の植物を買って帰った。茎が棒状に伸びるのが本来の姿なのに、左の茎は石化して珊瑚のような形をしている。植物が石化する理由はよくわからないが、ちよつとふてくされた様にも見える。

そういえば最近石化している花(鶏頭やアンスリウムの花の部分など)を好んでいけている。

ユーフォルビアは育てたいので、根付きのまま深い鉢に入れ、ゼラニウムと取り合わせた。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015 年
6 月号
No. 624

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





「水生華」

この度、縁あって陶芸・美術作家の近藤高弘さんと、当流副家元の桑原櫻子との二人展を「富春軒」で開催させていただいた。

近藤さんは京都清水で磁器の染付で人間国宝となられた近藤悠三氏の孫にあたり、伯父様の近藤豊氏の死去を機に陶芸の道に入られた。制作にあたっては「水」を常に意識されて、水滴を表した「銀滴」シリーズで独自の境地を開拓してこられた。

櫻子は京都で330年の歴史をもつ花道・桑原専慶流の14世家元の長女として、幼少より花の道に携わる一方で、料理研究家としての顔ももち、自然の恵みと美しさを伝える活動を続けている。

今回の「水生華」では、近藤さんの「水」をテーマにした作品群が、和の暮らしの中でどんな反応を見せてくれるのか、そこに「華」が加わることで何が生まれるのかを体感する中で、アートについて、花道について、深く考える機会を得ることができた。

「水生華」の余韻を今後に生かすため、写真と文章で記録に留めたいと思う。

「水生華」特集

水の町家に 風を感じて

会場となった「富春軒」は花道の道場であり、花道家元の住居でもある。祖父の代で花を養う細長い水溜が土間につくられ、父と母の代で水溜は3つに増えて、季節の葉や花を浮かべるようにしている。

今回、近藤高弘さんはこの家を「水の町家」と表現してくださった。日頃とくに意識していなかったが、言われてみると「水」を生かして暮らしていることに気付く。母がうるさく花の水換えの大切さを言ってく



近藤高弘 ガラス・インスタレーション 桑原櫻子 花：黄金板屋楓 鉄線数種 八角蓮 白花敦盛草

れていたことも、「水の町家」の要素になっているとも思う。

二階の上段の間は一尺だけ高くなっている。そこがタイトル「水生華」の舞台になった。氷のような、雪のような作品を近藤さんが配置していく。「僕の作品を水だと思つて花をいけてください」との投げかけに応じて、季節の自然を櫻子がいけていく。

そして「水の器」と花たちが明かりに浮かび上がる。

このイベントには、近藤さんの推薦で、現代アートの旗手の一人、大船真言おほふねまことさんにも協力をお願いし、一階の2つの床の間に大船さんの絵が加わった。

表紙掲載の絵は深い青色に縦に白い筋、9頁の絵は淡い青色にぼんやりと横に白い帯。事前に床の間を見に来られて描いてくださったもので、材料は天然岩絵具である。空間にも近藤さんの器にもびたりと調和していた。

その床の間に櫻子が花をいけた瞬間、見ていた大船さんは「風」のようなものを感じたと、後で教えて下さった。そんな風を自分の作品にも吹かせたいと。

「命は水から生まれいずる」水から生まれいずる華。水生華。近藤さんの水の表現は、水の町家を潤し、櫻子の生けた花たちは、水を得た命の美しさを見せて、人の心に風を送ってくれた。家と器と花と絵とが心地よく響き合った。

桑原専慶流十五世家元 桑原仙溪

「水生華」 桑原櫻子×近藤高弘

日時…5月9日(土)・10日(日) 11時～17時

場所…富春軒「桑原専慶流家元宅」

入場料…500円



近藤高弘 坐像：Reduction - 滝 - 桑原櫻子 花：乙女百合 屏風：山田古香筆 「赤壁の賦」前編



近藤高弘 器：MSI
桑原櫻子 花：有馬の馬の鈴草



階段を上がった二階、上段の間が「水生華」の舞台に。



瞑想 (4頁)

玄関の間で迎えるのは、滝に打たれて瞑想する坐像。組まれた手の上で可憐に咲く乙女百合。震災と原発事故を経て、人と自然との関わりを問い直す近藤さん自身の姿に、東北ゆかりの花が寄り添う。屏風に書かれているのは中国・宋代の詩人、蘇軾(蘇東坡)が、長江の戰場趾を訪れ、人の儂さ愚かさ、自然の雄大さを対峙させた韻文。
文字の滝の前で、人と花とが一つになる。



Tradition and Modernity: “*Suishōka* (Water, Life, and Flowers)”

Takahiro Kondo, ceramic artist

Kyoto often makes me feel and consider its deep and essential traditions that have been passed down for generations. Such an encounter with traditions is very inspiring for me, as I am always seeking new and modern ways of expression, and it drives and motivates me to create art standing face-to-face with each key element of such traditions. While it is often said that Kyoto is a city of “traditions and innovations”, I believe that innovations only come from authentic traditions that live on in the historical city and not from those that appear to be traditional on the surface.

It was two years ago that I first visited Fushunken, the house of Mr. Kuwahara, the Grand Master of the Kuwahara Senkei School of Ikebana. After going back and forth along the Rokkaku Street, I finally found and entered Fushunken’s front gate. I walked down a long and narrow path, when suddenly, I saw flowers floating in a small stone pond glowing in the sunlight. At that moment, it felt as if my entire body was taken into a completely different dimension. I was also impressed by the greenness of maple leaves in another pond near the front door, and I instantly thought that this place is a “*Machiya* of Water”. I was also amazed by the inside of the *Machiya* where the space and atmosphere were created meticulously with fine materials including lamps and shades of discerning taste, and flowers in vases of different materials, colors and shapes. When I saw the upstairs salon used as a room for learning *Ikebana*, I thought that “the students here must be very lucky to have the opportunity to learn *Ikebana* in such a place.”

At the age of 25, I left the company employment in Tokyo and decided to start my career as a ceramic artist, driven by the shocking death of my uncle Yutaka Kondo (ceramic artist) who took his own life. Up until then, I was an athlete, a table tennis player, and had little interest in art, and it was only when I came back to Kyoto that I started learning ceramics and art from the beginning. It was around the age of 30 when I acquired the minimal standard of the basic ceramic skills and techniques I needed for my work. However, I had been struggling for a long time to find my own unique theme for my art. Around 1994, when Kyoto commemorated the 1,200th anniversary of its foundation, I came up with the idea of “fusing contradictory elements” inspired by the city of Kyoto where old and new elements are all mixed and combined. Then, I began to create my artworks with the keyword of “representation of

water born from fire (kiln) through earth”, based on the image of **fire** and its opposite, **water**, which are both essential elements of ceramics. Since then, I have been working on various expressions of water using glass and *Gintekisai* (silver mist overglaze), my original patented technique.

When Mr. Kuwahara asked me if we could create some kind of exhibition at *Fushunken*, it was easy for me, whose main theme is water, to visualize the installation of artworks in this *Machiya*. Accordingly, we collaborated to create this exhibition and demonstration of *Ikebana* (*Hanadēmae*) with the concept of “*Suishōka* (Water, Life, and Flowers)”. This event was also a part of “PARASOPHIA: Kyoto International Festival of Contemporary Culture 2015” the first international art festival in Kyoto, and was held on the last day of the art festival. I believe we have succeeded in presenting some of the interesting aspects unique to Kyoto where tradition and modernity integrate. The number of foreign tourists visiting Kyoto continues to rise every year, and I think that it will become increasingly important to introduce our culture through the presentation of Japanese aesthetics and sensibility from Kyoto to the world.

The devastating earthquake that hit Japan in 2011 made us, the Japanese people, reconsider our way of living and the relationship between nature and the human. In our hectic daily lives, we sometimes forget about simple and natural things such as a flower (life) living in **water**. However, there is sometimes a brief moment where you realize that nature, body and soul have become as one; for instance, when you are arranging flowers in a vase, or for me, when I am working with clay and fire. I want to cherish such momentary feeling and let them permeate every cell of my body.

Takahiro Kondo

1994 Kyoto City Emerging Artist Award.

2002 supported by Japanese Ministry of Culture grant for overseas study.

Public Collections

Metropolitan Museum of Art, N.Y.

National Museums of Scotland, Edinburgh etc.

Sakurako Kuwahara

Born in Kyoto as the first daughter of the Grand Master of Kuwahara Senkei School whose history dates back to the 17th century, Sakurako has learned *Ikebana* since the age of six.

Currently, teaching *Ikebana* as the Vice Grand Master, she also runs the cooking salon “Cherry Kitchen”.

翻訳：佐藤美奈子



伝統と現代

近藤高弘

京都は、深く本質的な伝統が脈々と流れていると体感することがある。現代の新たな表現を模索してきた私にとって、それは、とても刺激的な出会いであり、そこからその重要な要素のモノやコトと対峙しながら、制作へと向かう意欲へと駆り立てられることがある。京都が、「伝統と革新」の都とよく言われるが、うわべだけの伝統的なものではなく、本当の伝統が息づいているからこそ、革新が生まれるのだと思っている。

さて、ご縁があって桑原さんと知り合い、2年前に初めて富春軒におじゃまさせていただいた。六角通りで何度か入り口を通り過ぎてしまい、やっと見つけて長い路地に入っていくと、パッと光がさし水のはられた石囲いの中に迎え花が浮かべてあった。その瞬間、私はまったく異次元の世界に引き込まれたような感覚が身体に走ったのを記憶している。そして、次に中玄関でも水の中に沈められた楓が青々としているのが、また印象的でその時、ここは「水の町屋だ」と思った。家の中にも、様々な花器に花が生けられ、またセンスの良い照明器具など、細部にこだわった素材や空間造りがされている町家に驚くとともに、2階大広間が、お花のお稽古場になっていることを見せてもらって、「ああ、ここでお稽古される生徒さんたちは、なんて幸せなことだろう」と、思った。

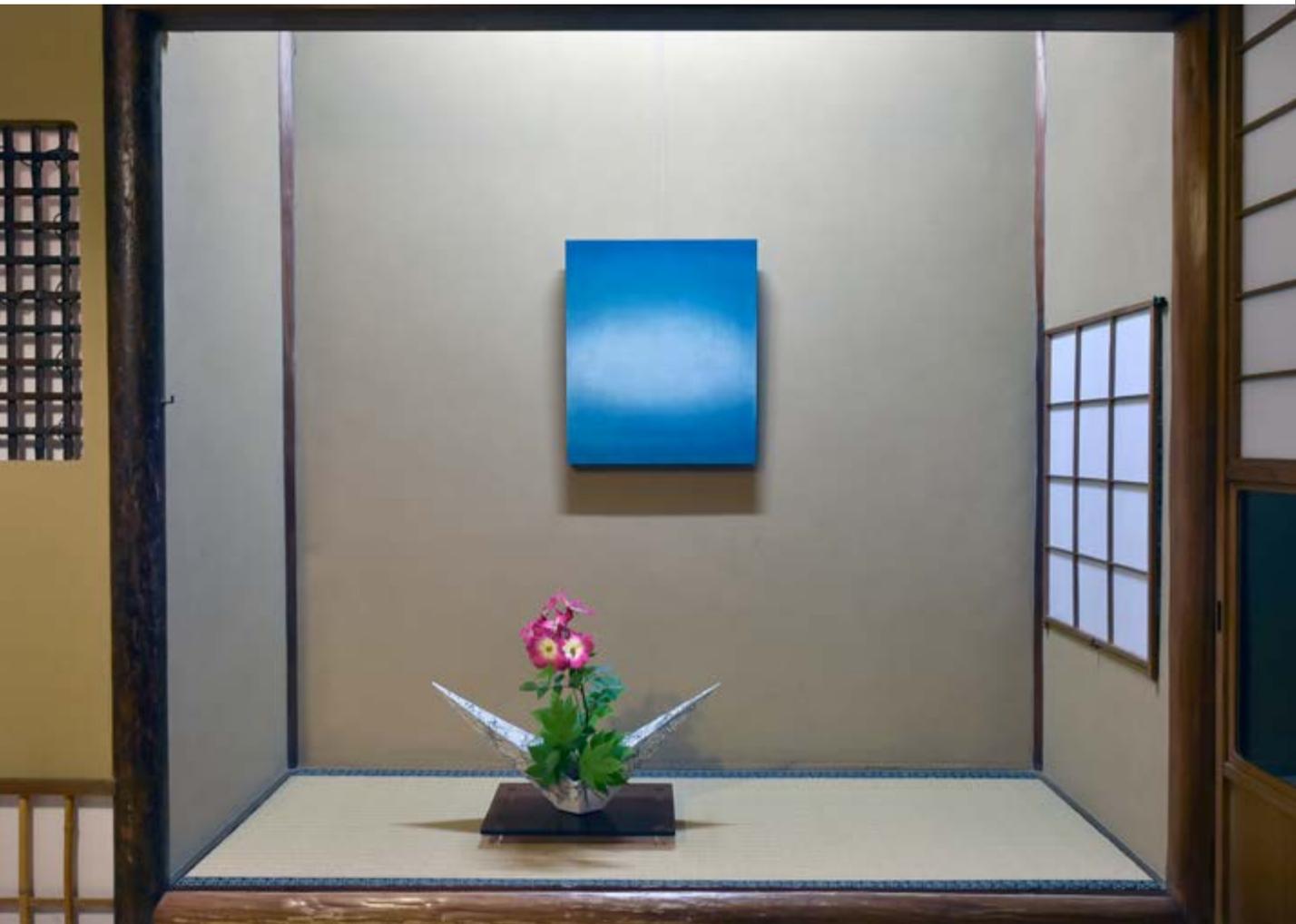
私は、叔父（陶芸家・近藤豊）の自死の衝撃で、25歳の時に東京の会社を退職して、この道に進むことを決めた。スポーツ選手（卓球）だった私は、若い時は美術にはほとんど興味がなく、京都に戻ってから陶器やアートのことなど一から学ぶこととなった。30歳を過ぎてようやく、何とか基本的な技術は身に付き始めたが、個人作家としてどのようなテーマで自分独自の作品を作っていくのかという暗中模索が続いていた。ちょうど

1994年京都が建都1200年の年を迎えるころ、古いモノと新しいモノが混然一体となっている京都の町を客観的に捉えることで、「相反する要素を融合する」というテーマが生まれ、その後、焼きモノの重要な要素である「火」と対極にある「水」をイメージし、「土を媒介に火（窯）の中から生まれる水の表象」というキーワードを素に、作品を制作するようになった。そこから、銀滴彩のオリジナル技法（特許取得）やガラスなど水をテーマに様々な表現を試みている。

桑原さんから、この富春軒で「何か展覧が出来ませんか」という打診をいただいた時、水をテーマにしてきた私にとって、それは、直ぐにこの町家での展示イメージが拡がり、今回の「水生華」というコンセプトも生まれ、コラボレーションの展覧会と華手前というイベントが実現した。丁度、京都国際現代芸術祭2015「パラソフィア」という京都で初めての国際アート展が開催されている、その最終日に合わせての関連イベントということにも連携でき、京都でしかできない伝統と現代が融合する面白さの一端を提示できたのではないかとと思っている。

年々、京都には多くの海外からの観光客が増え続けているが、京都から日本人の美意識や感性を世界に伝えることは、今後益々重要な文化発信となるであろう。

2011年3・11の災害と事故を経験した我々日本人は、改めて自らの生き方や自然と人間の間を関係性を考えさせられる大きなきっかけとなった。「水」に生きる華（いのち）という当たり前の事に、つい日常に追われて忘れてしまうことも多いが、たとえば、花を生けるという行為や時間、私であれば、土や火に向き合って制作しているときに、ふっと立ち現れる自然と身体と魂の一体感の余韻に気が付くときがある。そんな瞬間の感覚を大切に、その一瞬を自らの細胞の中に染みわたらせたいものである。



近藤高弘 器：銀滴彩器 桑原櫻子 花：薔薇 板屋楓 大船真言 絵：「STILL WAVE #7」

華手前

近藤さんの銀滴彩器を使った少人数での茶会を行って、櫻子による華手前をご覧頂いた。

水を打った路地を入り、庭をめぐってお茶室へ。はりつめた空



気の中に、亭主が花を切る鉄の音が心地よく響く。季節の花のみずみずしさが、部屋の空気を優しくしてくれる。

謙虚な心で、精一杯のもてなしの演出を。亭主の気持ちをはたがかりに伝えてくれる。なによりも花をいけた櫻子が感動していた。花道の本質に触れたのだらう。

櫻子を選んだ花は朱鷺芍薬と斑入葉の紫蘭。折り鶴に似た器に乗って空を飛んでいるようだ。お茶は冷煎茶。使われた水は近藤さんが大峰山から持ち帰って下さった「ごろごろ水」。菓子は「青洋」青山洋子さんがこの日のために作った「潤」。丁寧に削られた青竹の楊枝を添えて。









水生華を終えて 櫻子

近藤さんの銀滴碗を初めて拝見して手に取った時、零れ落ちる様な水滴が表現された美しき器に驚きました。

自然が生み出す一瞬の造形のよ
うな姿が銀の滴となつて表れ、焼
きものとして完成されていました。
今までに見たこともないような
作品でした。

ガラスインスタレーションも溶
けていく氷に見立てた作品でした。
儂く溶けて追いかけても追いか
けても消えていく美しい雪の結晶。

どんな花が似合うかしら。

この器のように繊細で、出逢う
事の少ない特別な花。敬意と愛情
を込めていけたいと思う。

ずっと想い描いていた夢を実現
出来た三日間でした。

氷達に包まれて、木や花達がし
なやかに力強く咲いてくれました。
水生華に関わって下さった方々
の想いが、花と器と家を生き生き
と輝やかせたのだと思っています。

△表紙の写真▽

近藤高弘 器：氷裂

桑原櫻子 花：薔薇二種

大船真言 絵：crevasse

近藤高弘 「雫」 桑原櫻子 花：金鎖

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016年
6月号
No.636

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





おおよまれんげ
大山蓮華

△表紙の花▽ 櫻子

大山蓮華は山に咲く蓮に似た白い花で、奈良の大峰山系などの自生地では国の天然記念物に指定されている。5〜7月の梅雨時期に開花する。深山の林間に野生し簡単には見る事が出来ないで「天女花」とも呼ばれている。枝は分岐し幹は直立しない。

花は横を向いて咲く。同じモクレン科の木蓮や朴の木は大きな花が真上を向いて咲くの、この花は不思議だ。蜜を出して蝶や蜂をおびき寄せるような事はしないらしい。そのかわり白く可憐な姿と素晴らしい香りだけで、虫も人もとりこになる。

この花は花屋で買い求めたのだが、多分中国原産の園芸種で、ホオノキとオオヤマレンゲの雑種であったウケザキオオヤマレンゲだと思う。ホオノキに似て葉が大きく成長が早いので出荷できるのだろう。それでも一年に一度出逢えるかどうかの花。無垢な美しさを鉄線と合わせてみた。



岐阜花フェスタ記念公園にて
横向きの花を上に向けて撮った



裏白の木

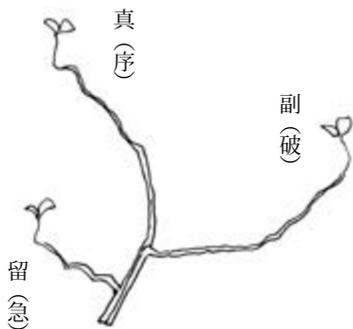
△2頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草の花型 副流し

花材 裏白の木 (薔薇科)

花器 三つ足青磁水盤

裏白の木は山梨、銀葉などと呼ばれることがある。初夏の葉がひろがってしまふ前と、秋の赤い実が花材となる。太い枝は折れやすいので注意する。



花菖蒲と紫陽花

△3頁の花▽ 櫻子

花材 花菖蒲 (菖蒲科)

紫陽花 (紫陽花科)

花器 カットガラス・コンポット

大きなガラス花器に立てた沢山の白い花菖蒲。大輪ビシクの紫陽花との色と量感のバランスを楽しんだ。美女二人と貴公子達?。



横に生ずるは横に

主材 五月梅(梅花空木)

(紫陽花科 以前は雪の下科)

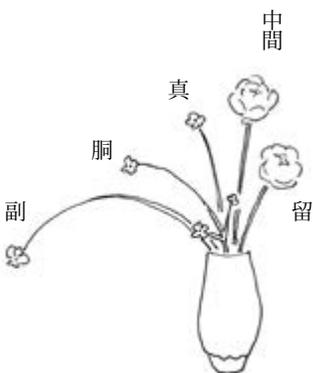
副材 芍薬2種(牡丹科)

花器 陶花瓶

328年前に流祖が書いた「立花秘傳抄五」(立華時勢粧八卷の内の一つ)の中に、「我が心草木にまかせて念慮なく、植に生ずるは植に、横に生ずるは横に遣う時は、草木自然の体顯わなるべし」という言葉がある。これは立花に限らず、生花、投入、盛花にも等しく当てはまる、言わばいけばなの基本中の基本理念である。

上の写真は、横へ長く伸びた五月梅の枝をそのまま生かして、大輪の芍薬2本を添わせたシンプルな投入。五月梅は足元を割り、皮を削っていける。芍薬の葉が自然にひろがるように、いけてから葉をさばく。花がいきいきして見えることがまず大切。これからの季節は切り口を時々切り直すこと。花器の内側のぬめりも拭き取って、新鮮な水でいけ直すと少しでも長く楽しめる。

投入垂体副主型





③ 中間の位置に2本目の芍薬を挿したところ。芍薬は葉に霧を吹き、別の花瓶などで水揚げをしておいて、さっと挿すようにする。最後に真の位置に五月梅をのぞかせて奥行きをつくる。(4頁の花)



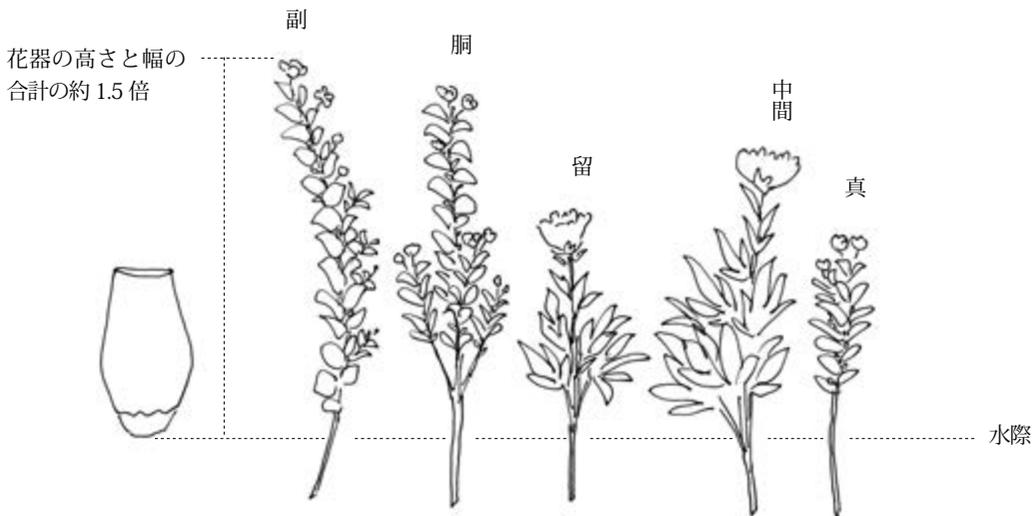
① 五月梅の長く湾曲した枝を副の位置に挿し入れる。五月梅は低木だが、いける前に水切りをすること。さらに足元の皮を削り、切り口を割っておく。



④ 右横から見た奥行き。



② 胴の位置に枝分かれた五月梅を加えて水際の景色をつくる。次に留の位置に芍薬を挿す。花瓶に花を挿すときは前へ傾けて出すものからいけると留まりやすい。



それぞれの長さ。主枝の長さは、花器の高さと幅を足した長さの1.5〜2倍を目安にして、水の中の深さを加えて切る。

立花秘傳抄 一

常磐木之部 (つづき)

松の一色は祝言第一の花にして、又一色のその一つなり。移徒わたましの時かならずこの花を指す。近代初心の人、相伝よくしてみだりにこれを指す大きにおそるべし。たとい少々伝授したりとも、年来の巧者にあらずは松の景氣の妙なるところ瓶上にうつしがたし。たとえば筆道をよく相伝したりとも、手習いの鍊磨なき時は文字のかたち悪しきがごとし。松の一色は四季ともに立てるといへど、菊漸よすがく終わるより紅梅やや咲くころまでこそ松の一色は面白けれ。されば神無月時雨にそめぬ松とはいへど、かつは葉もきばみ霜にいたみ雪にうづもれて、替わりたる葉色もいづるは、山もあらわに峰もさびしきころなるべし。いでやこのころの人の春の末より秋の半ばまで変わらぬ色の松一木瓶にあつめて一色となす、何の面白きことかあらん。松は色どり第一にしてむつかしき物なりと古人も云え

いでや||いやはや(不満の氣持がこめられている)

松に苔晒木を付ける時は、体用よく和合して一木の氣色をうつすべし。これ立花の肝要とする所なり。晒木は高山の物なれば、松の氣色も年ふり枝たれて、陰かげたかき心を指すべし。若松みどり松には用捨ようしやあるべし。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三卷 立華時勢粧』(日本華道社刊)
『花道古書集成 第一期第二卷』(大日本華道界刊 思文閣出版刊)

松の一色真の花形

第百九図

立花 松一色

桑原治郎兵衛(初版では富春軒松 苔)



同



松の一色行の花形

第百十図

立花 松一色

富春軒

松 苔 松毬

富春軒

「立花秘傳抄」の花材解説部分は、「木」の字の成り立ちの説明から始まる。これは立花を立てる心得として、草木の目に見える姿だけでなく、自然の生い立ちそのものに思いを致すことの大切さを説いていると思う。そして先ずは「松」。全118図のうちの85図に松が使われていることから、いかに松が大事なものがわかる。

ここに松一色立花、砂の物の図を載せておくが、木版刷りに手彩色で様々な色が松葉に塗り分けられている。ただ同じ緑の松だけで立てたのでは何も面白くないのだよと、文中にも書かれている。立花の奥深さを感じるところである。

松の一色砂の物

第百十一図

二株砂物 松一色

(初版では富春軒)

松 晒 苔 松毬

同砂之物





山帰来の根

仙溪

流展(岡山) 出品作

花材 山帰来(猿捕茨)の根

アンズリウム ミリオクラダス

花器 銀織部花器(柳原睦夫作)

この骨のようなものは猿捕茨の根を晒したもので、このように地中であって普段目にするのではないものも、いけばなではいけることがある。地中にあっても植物の造形の一部。美しく使って他には無い雰囲気を出せるかどうか。宇宙的な花器で星雲のように。



ネオレゲリア・ファイアーボール

ミリオクラダス

ル(レッドパウワウ)

櫻子

流展(岡山) 出品作

花材 ネオレゲリア・ファイアーボール

アマリリス オンシジウム

花器 条文扁壺(竹内真三郎作)
このネオレゲリア・ファイアーボールは鉢植から出た一本の茎のままをいけている。花器から出した支柱に根ごとフェルトでくるんで留めた。水やりは葉の中心に霧を吹く。

岡山県本部主催
桑原専慶流いけばな展
テーマ…ENN

共催…倉敷市文化連盟
後援…岡山県文化連盟、岡山市、
倉敷市、倉敷市教育委員会、
山陽新聞社、桑原専慶流家元
会期 4月20日(水)～25日(月)
会場 岡山天満屋
出品 前・後期 合計180名



今回の会場構成は役員の先生方による発案で、気持ちよく鑑賞できると大変好評だった。会場中央に吊られたスクリーンの間から、その奥の花席や人が見える風通しの良いレイアウト。苑、縁、艶、様々なENNをテーマにした大作の見応えある花席と、中作、小作、掛け花がバランスよく配置され、静かな生花コーナーも気品があり、

桑原専慶流の多様ないけばなを楽しんでいたただけなことと思う。会場入口前の「みどりの広場」にて花手前、呈茶、雅楽演奏、箏曲コンサートがあり、多彩な内容の花展であった。また、入口に熊本地震災義援金箱を設置。来場者・出品者に協力を願ひし、集まったお金を赤十字を通して寄付させていただいた。





会期中に鳳雅会による雅楽演奏
と三鈴会の皆さんによる箏曲コン
サートを楽しんでいた。演
者の方々にもいけばなをゆつくり



ご覧いただけただので、今後このご
縁がひろがっていきますように。



ネオレゲリア 櫻子

花材 ネオレゲリア・アネックス

(バイナップル科)

胡蝶蘭(蘭科)

花器 ガラス花器

胡蝶蘭と取り合わせているのはネオレゲリア。熱帯から亜熱帯アメリカに分布するバイナップル科の着生植物。薄いピンク色に色づいているので花のようだが、硬い葉がこの様な形を作っている。花は株中心の筒部分に咲くが、あまり目立たないので葉が花の代わりをしているようだ。

4月の岡山での流展でもネオレゲリア・レッドパウワウとアマリリスの投げ入れをいけさせていただいた。このネオレゲリアの花は赤紫色の子株を沢山付けた形で面白く、変化がつけやすかった。エアープランツに近いので、水に浸けなくても良いが、中心部の筒に水を溜めるように与える。もともと真上を向いている植物なので、前に向けていける事は溜め込んだ水がこぼれてしまうから、迷惑な事だろうなと思いつつながら霧吹きで朝晩水をやり続けた。花会の間は寝ても覚めても花のご機嫌を伺いその変化を眺める事ばかりだ。

胡蝶蘭も流展が終わってから松村先生から頂戴した。岡山産の切りたての花だったので、京都に持って帰らせていただいた。60℃程のお湯の中で水切りしてもと通りに。一ヶ月以上もの間美しく元気で嬉しかった。

岡山流展の思い出に何度も浸りながらこの花を見つめている。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017年
6月号
No.648

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





宝鐸草

△2頁の花▽

仙溪

花材 七竈ななかまど（薔薇科）

スイートメモリーほうちやくそう（百合科）

宝鐸草ほうちやくそう（百合科）

花器 ガラス花瓶

庭のホウチャクソウが年々遅しく育っている。4月末頃の花の盛りに数本切つて写真に撮った。

赤いガラス花器に、ナナカマドの若い翠とホウチャクソウの優しいみどり、百合のやや濃い緑が重なって清々しい。薄紅色の花色と花器の透明な赤が、みどりの濃淡を一層引き立ててくれている。

ホウチャクソウは花の後に実が膨らんでやがて黒く色付く。また違つとり合わせて楽しもうと思う。

横から見た奥行き





ライラック

△3頁の花▽ 櫻子

花材 ライラック(木犀科)

薔薇(薔薇科)

花器 ガラス花器

(チエコ・モゼール)

ライラック(リラ)は水揚げの難しい花だが、優しい花色と甘い香りが大好きなので、皮を削り足元を割って短くいけ、少しでも長く楽しみたい。黄バラの潑刺はつらつとした鮮やかさが加わることで、初夏の生命の輝きが感じられる。

横から見た奥行き





創立50周年記念
 日本いけばな芸術展
 5月10日(水)～17日(水)
 東京日本橋高島屋8F

日本いけばな芸術協会・
 名誉総裁の常陸宮妃華子
 殿下をお迎えして行われ
 た創立50周年記念式典で
 は、桑原専慶流華老の上
 野淳泉先生(岡山県)が
 50年間の役員歴に対して
 表彰を受けられました。
 上野先生は13世家元と
 ともに、発会当初から参
 画され、以後50年間、欠
 かすことなく花展に出品
 し、現在は協会の特別参
 与になっておられます。
 永年のご功績に敬意と感
 謝を表します。



立花秘傳抄 二

花之部 (つづき)

桃

祝言。上中下。苔晒木つけず。

時珍曰く。桃の性、花早く、子繁し、故に字木兆に従う、十億を兆と曰う、その多きを言つ。

異名 仙木 招客 不言

和名 八千代草 八重桃 緋桃 白桃 源

平桃 西王母。

古歌

人来やとまやの軒端の柴がきに立ちかく
れたる姫もものはな
のむ人や千代をかくらん御酒古草叶齡の
こころなりせば
あかねさす色こそまかへ日本のむろふの
けもも花さかりかも

桃の木つき、枝ぶりすなおにしてはたらきな

く、挫に苔晒木を付けざる古法なる故、替わりたる花形も出来ざる物なれど、松檜の風流なるをあしらうべし。立てよう梅に同じ。

海棠

祝言。上中下。苔晒木つけず。

李贄皇集に曰く。花木、海を以て名と為者悉く従う、海上来 海棠これなり。立て様梅に同じ。

異名 海紅花 海棠梨。

梨の花

祝言。上中下。苔晒木つけず。

異名 玉乳 鶯梨 和名 詳ならず。

辛夷木

非祝言。上中下。苔晒木つけず。

木筆。

非祝言証歌

打ち捨てて手をにぎりたるこぶしの木心
せばきをなげくころ哉。

杏の花

祝言。上中下。苔晒木用いず。

異名 金杏花 甜梅花

古歌

いかにしてにほひそめけん日のもとの我が国ならぬからももの花
もろこしの吉野の山に咲きもせておのが名しらぬからももの花

百日紅

祝言。上中下。苔晒木用いず。

異名 紫薇花 猴刺脱

蘇枋花

祝言。上中下。苔晒木用いず。

右の五木立て様梅に同じ。

木蓮花

非祝言。上中。

異名 鬼饅頭。

桜、梅と続いて次は桃。桃の木は枝ぶりが素直なので、松や檜の風流なものをあしらうといいと書かれている。桃は第四十九図に見られ、真と請に使われているが、どちらにも素直に伸び上がる姿なので、変化のある伊吹を流枝にすることで、花形に面白みを加えている。桃の桃色と山吹の黄色に、春の華やきを感じる。

立花図には他に第七図で白木蓮が使われているので、再掲載となるが紹介しておく。赤い躑躅が白い木蓮に華やきを与え、非常に大きな枇杷の葉をあしらいに使うことで、整然とした花形に躍動感を与えている。この大きな枇杷の葉先は黄色く彩色されていて、花形の要として風格を感じる。



第四十九図

立花 桃除真
山本四郎左衛門
桃 山吹 伊吹 晒木 柘植
馬酔木 枇杷 蒼莪



第七図

立花 木蓮除真
除真立の内真の花形 富春軒
木蓮 伊吹 松 柘植 躑躅 小菊
檉木 枇杷 著我 要

※参考文献
『いけばな美術名作集 第二巻 立華時勢粧』
(日本華道社刊)
『花道古書集成 第一期第一巻』
(大日本華道界刊 思文閣出版刊)
※立花図転載
『華道古典名作選集 立華時勢粧』
(思文閣出版刊)

平安神宮献花会
会期 5月13日(土)～14日(日)
会場 平安神宮 額殿





卵の花

△9頁の花▽ 仙溪

花材 卵の花(雪の下科)

芍薬(牡丹科)

花器 赤茶色釉陶壺

花屋ではウノハナ(卵の花)の名前で売られていたが、ウノハナはウツギ(空木)の別名。この小さな花はヒメウツギだろうか、はじめていける花材だ。ごま粒ほどの白い蕾が穂になって枝にびっしりついている。枝は猫の尻尾のようにしなやかに弧を描いて伸びている。枝の動きを生かして、空いた空間にシンプルに芍薬だけを覗かせた。白い小さな花の連なりと、豊郁とした桃色の花、面白い調和が生まれた。

横から見た奥行き



フリチラリア

△表紙の花▽ 櫻子

花材 フリチラリア(百合科)

アンズリウム(里芋科)

アロカシア(里芋科)

ミリオクラダス(百合科)

花器 ガラス大鉢(近藤高弘作)

フリチラリアは黒百合や貝母百合の仲間だ、イラン、トルコ、アフガニスタンなどに分布する多年草。頭頂部に小葉が集まってつく品種が一般的だが、写真のフリチラリアの先端に小葉はない。調べると、頭に小葉のあるのがインペリアス、今回つけたのはベルシカという品種のようだ。茎が太く丈夫で存在感がある。大輪のおほげアンズや、大きなアロカシアの葉といけても、それらに負けていない。茎に動きもあるので、アンズリウムと共にゆったりと立て、足元はアロカシアで引き締めた。最後にミリオクラダスで水際を整える。

表紙の花





赤と白のユリ

△10頁の花▽ 仙溪

花材 ハンギングヘレコニア

(芭蕉科)

百合2種(百合科)

花器 網目文陶花器

(竹内眞三郎作)

ワインレッド色と純白の大輪のユリ。少し前まではこんな色使いをしようと思ってもできなかった。こんな見事な花をつくる人がいることに感謝である。毛の生えたハンギングヘレコニアともよく合っている。器には敢えて色の無いものを選んで、花の色を際立たせた。

花菖蒲の生花

△11頁の花▽ 仙溪

花材 花菖蒲(菖蒲科)

花型 行型

花器 黒波文金彩陶水盤

(竹内眞三郎作)

東京の花展で、ジャーマンアイリスの生花をいけたこの器に、今度は白花の花菖蒲をいけてみた。形も模様もモダンな器なのに、葉組の生花がよく映る。花は真、内漆、副、胴、留に入れ、葉組のみの副沈みと控を加えて、七体でいけている。花菖蒲の生花にはいい花と、それ以上にいい葉が必要である。



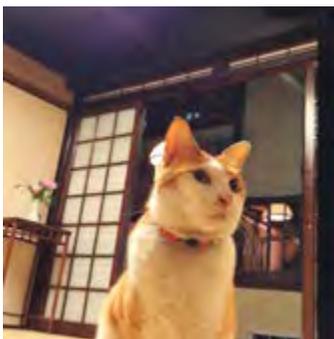
【 記録 】

月刊茶の間 2017初夏号
 今、あなたに会いたい
 京を継ぐひと伝えるひと
 桑原櫻子さん



レモンちゃん

賀茂川の河原で保護されたレモン
 ちゃんが家に来て5年になる。人見
 知りをしない穏やかな性格なので、
 彼に会うのを楽しみに稽古に来られ
 る人も少なくない。時々生徒さんに
 混じって話を聞いていたりする。





宮下先生の器

仙溪

花材 金鎖(豆科)

宿根スイートピー(豆科)

花器 彩泥陶扁壺

(宮下善爾作)

器の底は菱形で、左右の角からは緩やかなS字を描いて立ち上がり、前後の角からは直線が垂直に昇ってゆく。どうすればこんな形がつくれるんだらう。幾層にも重なる彩泥のグラデーションは、彼方まで続く山の連なりを縦に切り取ったようだ。

この器を作られた宮下善爾氏が他界されて5年になる。宮下先生(と私達は呼んでいる)はもう居られないけれど、こうして先生の器に花をいけることはできる訳で、そうすると何だかすぐ傍に先生がいるような気がして、変な花でもいけようものなら、辛口の批評をされそうに緊張してしまう。

魂を込めて作られたものには、作り手の気が宿るのだらう。いい器には不思議な力がある。

今回、東京の花展で使っていたのだが、黄色いキングサリが見事によく合っていて評判がとても良かった。宮下先生もきつと喜んで下さるだらう。テキスト用に少しとり合わせを変えて、再びキングサリをいけて撮影した。

金色に輝く空から、仙人が雲に乗っておりてくる、そんな感じの花。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018年
6月号
No.660

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



ライラック

△2頁の花▽ 櫻子

花材 ライラック(木犀科)

アマリリス(彼岸花科)

フィロデンドロン・レモン

ライム(里芋科)

花器 オレンジ色ガラス花器

ライラックの花弁の一つ一つは小さいのに、穂の様に集まって咲く姿を見ると心がとても豊かになる。色も綺麗で甘くて上品な香り、家族が好きたった花だけにこの季節は必ずいけて飾りたい。

切り花のライラックは一本立ちで売られる事が多いので、花型が単調になりやすい。たっぷりと厚みのある花姿になるようにいけてゆく。

水あげが悪いので、まず足元の皮を削り、さらに割って中心の髓をハサミで削り出す。そうしていけると良く日持ちしてくれる。

バラと合わせる事の多いライラックだが、細くて品の良いアマリリスといけた。レモンライムの葉を添えて。

横から見た奥行き





食卓の花

△ 3頁の花▽ 櫻子

花材 縮太藪しよまつぐさ (蚊帳吊草科)
満天星まんてんせい (躑躅科)

都忘れ2種 (菊科)

花器 カットガラス舟形花器

どこから見ても綺麗な食卓の花。シマフトイが軽やかで涼しそう。長くいけてもお料理の邪魔をしないように控えめに。四方正面で。



横から見た奥行き



レモンだより
友達のことをプーちゃんと呼ぶことにしました。(右がプーちゃん)



姫空木とベル鉄線

櫻子

花材 姫空木（雪の下科）
ベル鉄線（金鳳花科）
花器 丸紋染付花瓶

野に咲く小さな花を摘んで帰りたい、そんな気分に合わせてくれる野趣のある可愛らしい花材に出会えると、つい買ってしまふ。ピンクのヒメウツギやベルテッセンもそんな花の一つだ。

ウツギは茎の中心が空洞なことから空木と名が付いた。ウノハナ（卵の花）とも呼ばれ、卵の花月とは陰暦の4月のこと。今の5月にあたり、丁度ウツギがいつせいに咲き始める。ウツギの名がついた植物は多い。ある種のウツギは材質が固くて木釘の材料になる。花器の桐箱の木釘に使われているそう。幾何学模様の染付花瓶で、全体に抑揚を与えている。

横から見た奥行き



花菖蒲と紫陽花

表紙の花 櫻子

花材 花菖蒲2種（菖蒲科）
オクローウカの葉（菖蒲科）
紫陽花（紫陽花科）
花器 オレンジ色ガラス花器

今年には花菖蒲の季節が早くやってきた様な気がする。4月末には早咲きの薄紫色に加えて白や濃紫色も売られ、華やかなお節句を迎えられた。茎が太いものは殆ど3番目まで咲いてくれた。萎れた花の隣に次の花が出てくるのは嬉しいものだ。勢いある葉はオクローウカだ。ピンクのアジサイを足元に集めると、オレンジ色の花器と一体になってくれた。



横から見た奥行き



立花秘傳抄 二

通用物之部 (つづき)

小しだ

祝言。水ぎわ。

小貫衆こしだ(多識)。虎巻しだ(同上)。齒朶しだ(同上)。

小しだ通用に立てる。道理いかんと云うに、出生小草にして四時しほまず。春若葉を生ずといえど、古葉おちずして下葉より次第に枯れる。常に山木岸頭がんどうにはえまじりて、郊野こうや沢辺に生ぜず。これ草にして木にまじゆるの道理顕然なり。しからば何ぞ草にまじゆるや。いわく、出生もと草なるゆえこれをゆるす。古来の法なり。

小齒朶は三ヶの前置のその一つにして、秘伝あまたあり。今度に記しがたし。

小しだは立花第一のたすけにして四時用ゆるに、するどなる苔晒木をよくやわらげ、黄楊つげ引



第八十八図

立花 晒木直真

小しだ前置 桑原次郎兵衛

晒木 伊吹 梅擬 松 苔 柘植 小羊齒

躑躅 嫩 柏 檉木

「小しだ前置」は「おもと」「小しだ」「松」の「三ヶの前置」の一つで、「立花時勢粧下・秘曲の図」の中の第八十八図がそれにあたる。

小羊齒は立花第一の助けとなつて四季に使い、苔木や晒木の鋭さを和らげ、強々しい柘植や松の艶となり、窮屈な水際をくつるがせ、だらしなさを引き締めてくれる。木にも草にも相性がいよい優れものとしている。

松のこわごわしきにはつやとなり、水ぎわしま

りたるに優ゆうをあらせ、くだけたるをかたくな

し、裏の白きは下草の色を切り、木にあい、草

によるしく、水ぎわに指さで叶わずは小しだな

り。東国のかたには小しだのなき里もあるとき

けば、水ぎわこそとおもいやり待る。

前置には七枚九枚および十一枚まで用うべ

し。常の水ぎわには、二枚三枚遣うて意気はづ

みを専らに指す流もあり。又五枚七枚遣うて、

自然体を専らに指す流もあり。その変わりあり

といえども、妙所一にして修練なくては指し得

がたし。

小しだとくま笹と両方に指す時は、小齒朶表

ならばくまざさ裏葉を見すべし。景気同意なる

事を嫌う。

しだ火にてよくたまるものなり。葉三枚遣う

時は一本に一枚二枚ずつ付けて遣うべし。五枚

七枚も又この如し。裏表共に葉のなびきを見て、

さかしまにならぬ様に遣うべし。

萩

祝言。上中。

順和名、茅ぼうの字を用う。

和名、月見草。鹿鳴草。玉見草。秋遅草。

天智天皇

けふやかて露も色有初見草きのうの夢の

萩とおもへは

花尽異名

花咲はつれなき人も紅染草色にめてつる

けふやとふらん

藻塩草に顕昭法師の云う、万の草は枯れて、

春よりもえて花もさくに、古枝に葉もめぐ

み花も咲、それを木萩という。万葉集に真萩

と書きて木の部に入たり（下略）。これ通用

の証文なり。

通用の証歌

宮城野の露もいろある古枝草此年の秋も

花はさきけり

酴醾やまひぎ

祝言。上中心にならず。

順和名草の部に入。

異名、棣棠花。地棠花。

和名、かがみ草。面影草。

古歌

古里の面影草の夕はえやとめしかか見の

名残ならまし

同

おもかけをたかいにとめし鏡草忘れ衣の

形見ならまし

多識曰く、款冬かんとうは露ふきの臺とうの事なり。しかれ

ども古人万葉集中におおく山吹を詠して款冬

の字を用いる。又朗詠集これに同じ。あやま

りなりとぞ。

庭桜

祝言。上中。

心にならず。本草綱目、朱桜。

てまりのはな
粉団花

祝言。上中。心にならず。玉繡花ぎよくじゆうか

小手まり

同前。

こめやなぎ
米柳

祝言。上中。心にならず。

小米花

同前。

黄梅

祝言上中。心にも用いる。

連翹

上(右)に同じ。

第三十七図は真に黄梅おうばいの枝垂れが大胆に使われている。副の個性的な紅梅との対比で、黄梅をより優美に見せている。花材の個性を存分に生かす工夫を感じる。富春軒が大切にした「自由」がここにある。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三卷 立華時勢粧』(日本華道社刊)

『花道古書集成 第一期第二卷』(大日本華道界刊 思文閣出版刊)

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』(思文閣出版刊)

第三十七図

立花 黄梅除真

東湖軒(初版は富春軒)

黄梅 水仙 柘植 椿 梅 ひさかき 苔





キヤスケードタイプ

仙溪

花材 薔薇(薔薇科)

キヤスケード・シンビジウム

ム(蘭科)

アスパラガス・スプレング

リー(百合科)

花器 陶花瓶(加藤敏雄作)

この枝垂れた蘭は、キヤスケードタイプのシンビジウムで、途中で曲がった長い茎に10輪ほどの花が程良い間隔についている。なんとも優美な姿である。

キヤスケード(カスケード)とは階段状に連続する滝を意味し、滝状に垂れた姿を表す言葉になっている。花嫁が手に持つのはキヤスケード・ブーケ。懸崖菊もキヤスケードタイプと訳される。

蘭の色が引き立つように青い花器を選び、大輪咲きの赤バラを合わせて、スプレングリーで両者を繋げた。

横から見た奥行き





うけざきおやまれんげ
受咲大山蓮華

仙溪

花材 受咲大山蓮華 (木蓮科) もくれん

姫百合 (百合科)

花器 青白磁花瓶 (市川博一 作)

めったにいけられない花材にオオヤマレンゲがある。奈良県南部の太峰山たかねに自生し、香りの良い白い花を横向きもしくは下向きに咲かせる落葉低木。花の大きさは5〜10センチ。水揚げが難しく、お茶席で小さく一種いけにされる貴重な花だ。

もう少し大型の花が上向きに咲くのはウケザキオオヤマレンゲである。こちらは中国原産の落葉高木で、ホオノキ (朴木) とオオヤマレンゲの雑種だそうだが、稀にいけばな花材としてオオヤマレンゲの名前で売られている。

作例は太枝だったので長く保つてくれて、後ろに見える蕾も咲いてくれた。一種では寂しいので、姫百合をとり合わせ、深山の香りを楽しんだ。

横から見た奥行き





華鬘草けまんそう

仙溪

花材 クレマチス・エレガフミナ

(金鳳花科)

華鬘草 (罌粟科)

花器 銀彩陶花器 (森野泰明作)

ケマンソウは中国原産の多年草。花の形が団扇の形をした仏堂の荘厳具、華鬘けまんに似ることから名前がついた。でも、別名のタイツリソウ(鯛釣草)の名前の方が馴染み深いかもしれない。

そして濃い紫色小輪のテッセンはクレマチス・エレガフミナ。繊細な茎の先に次々に花を咲かせる、エレガントな花だ。

銀色の滝のような、爽やかな瑞々しさを感じる森野さんの小品花器に、この2種の花を挿した。どちらも普段はあまり見かけない花同士。こういう粋な器が似合う。

横から見た奥行き





七竈ななかまどの生花

仙溪

花型 草型そう 副流ぞえなが

花材 七竈しちそう(薔薇科)

花器 雲藍條文花器(森野泰明作)

この花器に水を張ると、山深い谷川の、心地よい風が吹いてくるように感じる。その心地よい水面を見せるいけ方が生花であり、立花であるとも云える。ナナカマドの若葉の清々しさが器に映える。

横から見た奥行き



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019年
6月号
No.672

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





物のこころ

仙溪

昔、年配のお弟子さんに「物にも心があるんですよ」と言われたことがある。京都で袋物を扱う店をされていて、手作りの物へのこだわりを持たれていた。作り手の心が物に移り、そこへ使う人の心も重なっていくと。

その人のお孫さんが先日お越しになって美しい竹籠を頂戴した。お祖母さまが生前愛用されていたとのこと。とても上品な籠化入れである。

作者は丹波篠山の箕浦竹甫さん（1934～2010）。田辺一竹斎さんに師事して技術を習得、篠山特産の雲紋竹を活用した竹工芸作家として活躍され、その技術は篠山市の無形文化財に指定されている。

丹波篠山の竹は竹細工に向いている。固すぎず柔らかすぎず。固いと折れるし、柔らかいと虫が食う。そんな地元の特性を生かした竹籠づくりに情熱を注いだ箕浦さん。きつとその箕浦さんの人物に惚れ込んで手に入れたものなのだろう。そんなことを思いながら眺めていると、籠に対する愛着が増してきた。

籠を思いながら花屋に行くと、3色のハナショウブが目にとまった。季節の品格を備えた花だが、過去に籠にかけたことがない。この籠の心が私に作用したのかもしれないと不思議に思う。竹籠を入れた桐箱には「花籃」と書かれていた。雅な心が名前にも込められている。



花菖蒲 卯の花

はなしょうぶ 卯の花

花材 花菖蒲 (菖蒲科)

卯の花 (雪の下科)

花器 手付花籃 (箕浦竹甫作)

水盤でいけることが多いハナシヨウブだが、籠に上品に納まってくれた。



オウゴンミズキ

はなごんみずき

花材 黄金葉土佐水木 (満作科)

芍薬 (牡丹科)

ミリオクラダス (百合科)

花器 面取陶花瓶

色彩は花色だけではない。葉色の美しさもいけばなの大切な要素だ。





南天若葉の立花

健一郎

『やつてみなはれ』家元は何を提案しても首を縦にしか振らない。道徳的に間違っていないければ何をしてもいい家である。そんな中、ここ数年で初めて首を横に振った提案が、この南天の新芽を使った立花である。確かに南天は冬を代表する花の1つで正月によく使われる。赤い実が愛らしい。花の命を大事に思った上で最高に美しいタイミングでお花を摘み取り器に生ける。そのためむやみやたらに花を生けることはできない。

植物には旬しゅんがあり、どの時期が一番美しいのかも若い頃から教えられてきた。南天の旬は冬だと分かっているながらも新芽の青々とした南天を眺めていると、それは大層魅力的に見えるのである。

ここ最近物事の見方が変わってきた。花の旬という概念があやふやになってきた。どの瞬間を切り取っても、その時にしかない美しさがあると思ってしまう。発芽した時の愛らしさ、青々とした新芽、花が咲き、枯れ、老木になつてさえも魅力は存在し続ける。それぞれが全て美しく、好みはあれど、その美しさに差はない。

どのタイミングであれ、花の命を摘み取り、人間が綺麗だと感じられるように器に再現する「華道家」。

それは神様のようにも思えるし悪魔のようにも思える。少しでも花の事を正確に知り、敬意を表す事は必要最低限の花に対する礼節でもある。もっともこれも人間側の都合なのだが。

一方で、植物が生物界を支配しているという考えもある。地球上の生物量（バイオマス）の内、99.9%は植物の細胞が占めているらしい。地面、空気、太陽だけで生活をする事ができ、常に捕食者たちから狙われていたために、リスクを分散しており、どの部分を食べられても死を迎えるわけではない。植物の死の曖昧さにはいつも頭を悩ませられる。種によっては様々な虫や動物たちを手玉に取り花粉を運ばせている。いつからか、この虫や動物の中に人間という生き物が含まれている気がしてならない。人間に気に入られた種の繁栄は人間が滅ばない限り保証されている。

人と植物の間わりは複雑だが、『やってみなはれ』という魔法の言葉で、私はいつしかいけばなの世界に引き込まれてしまった。そして花を敬う気持ちも次第に強くなってきた。私と植物の間わりは、より広くなり深くなつてゆく。

黄花海芋 きばなかいよう 大手毬 おおでまり

△表紙の花▽ 櫻子

花材 黄花海芋(里芋科)

大手毬(忍冬科)

ミリオクラダス(百合科)

花器 ガラス鉢

アンティークピンクのオオデマリと赤いガラス器のハーモニー。



横から見た奥行き

新緑の立花

△4頁の花▽ 健一郎

花型 除真立花 のきしん

花材 南天(目木科)

五月梅(雪の下科)

大手毬(忍冬科)

貝塚伊吹(檜科)

杜若(菖蒲科)

花器 陶花器



窮尽_レきわまる (心に用いず_レ菊一色以外では真に用いないという意味か?)

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ⑤⑧

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

菊

祝言。心に用いず。大輪は上より中まで。

中輪は中より水際まで。小輪は水際ばかり。

菊の字本鞠じもとまきくに作り鞠まきくに従う。鞠まきくは窮きゆうなり。

秋に至りて万花窮まなはきゆう尽しんす故之を菊と曰まをすう。

異名、隠君子いんくんし。紫毬しきゆう。

和名、かわらよもぎ。百夜草。契草しぎさ(古事

を以て名づく)。菊草あきしべくさ。星見草。

承和菊そがきくと云うは黄菊なり。これ菊の正色な

るゆえ帝愛し給うとぞ。

蔵玉集

長月の九日に咲いので草花は八重にてよ

ろず代や経ん

浅ちふもましる草葉もかるるまで野にの

こりける秋しべの花

名にしあふあつまの野べのこかね草これ



第百三回

立花 菊一色

菊の一色真 桑原次郎兵衛

菊 小菊

もみつきの数につままし

一色の心はふとく葉茂り枝多きをよしとす。大輪の菊にはまれなる物ゆえ、古来中菊をゆるして今も指すことにこそ。然れども大輪小輪上下相そむき、出生の景気うつらず。当流これを用いず。

一色を立てる時、流枝になる菊まれなる物なり。胴作りには葉菊とて猩々、加賀紅、大津物ぐるい、などの花さかぬ葉ばかりの茂りたるを用いる。これをしかみ葉とも云う。

菊の一色、近代は初心の人もみだりにこれを指す。誠に似たる事の似ぬ事なり。たとえ裏菊をさしたりとも、いかなる道理あると云う事を知べからず。又道理を知りたりとも一瓶の菊、ことごとく意気はづみ、色、つや、うつりよく、大中小花の品々をわかち、一種の色どりよく、うすからず、あつからず、しかも花形風流に指し得る事かたかるべし。惣て一色物は、師伝と修練との二つかけては



第一百四四図
立花 菊一色
菊の一色行 富春軒
菊 小菊

叶うべからず。

一種の菊を請 副に両方へ遣う時、縁のつ
づけ様口伝あり。

菊の葉遣い綺麗に見せんとて、一枚一枚糸
もてくくりつくろいたるは、さぞや造作なら
めと見る目もいとくるし。名ある人のせざる
ことなり。

菊は花より葉の能しを賞翫とす。葉しおれ
たらば一夜さかしまに井に釣るべし。茎にゆ
がみあらば火にてため、或いは竹を結いそえ、
横へ出すは針金を用いる。小菊は紙をまきて
その上をたむる。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第二巻 立華時勢粧』（日本
華道社刊）

『花道古書集成 第一期第二巻』（大日本華道界刊
思文閣出版刊）

同砂之物



第百五図

立花 菊一色

菊の一色砂之物 専定寺（初版は暁春軒）

菊 小菊



葉蘭生花

はらん
 ^ 9頁の花 ^ 仙溪

花型 生花 行型
 花材 縞葉蘭(百合科)
 花器 陶花器



レモンだより

新聞を読む邪魔をするのが好き。



日本いけばな芸術中部展
テーマ「新たな歴史への夢」
会期 4月10日㈪～15日㈫
会場 松坂屋名古屋店

④



⑥



⑤



⑦



①



②



③





初夏の杜若生花

健一郎

花型 生花 三花五葉 行型
花材 杜若(菖蒲科)
花器 祥瑞染付水盤

この生花をいけた後で、大田神社の沢に群生する杜若を見に行った。緑の中に浮かぶ紫色。花の格を見せつけられた。その姿は尾形光琳の『燕子花図屏風』を彷彿とさせた。光琳は杜若とどれだけの時間向き合っていたのだろう。杜若の格をよくよく表現できていると感心する。

先日、生まれて初めて絵を描きたくなった。バイクで京都北部の美山へ行った時、見た景色を絵に起こしてみたいと思ったのだ。奥の方から山の谷に沿って川が流れ、目の前には藤がこれでもかというくらいに咲きそろう、大木は藤に生気を吸い取られている。そして若い青紅葉が一面に咲いていた。写真では無駄な情報が多すぎる。私が意識しているところだけ写すなんて都合のいいことはできない。墨で山水画にしようともするが、頭の中だけで手が動かない。頭の中の絵は私の独り占めである。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2020年
6月号
No.684

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





二瓶飾り

△表紙の花▽ 仙溪

花型 生花 二瓶飾り

花材 七竈(薔薇科)

芍薬(牡丹科)

花器 陶鉢 一对 (フランス製)

過去の「テキスト」では白黒写真だったので、カラーで再掲載。

株分けや二重切り、二瓶飾りなどは、枝ものと草花のとり合わせを樂しめて、季節を感じる生花になる。

(2012年6月 588号より)

深山の宝石

△2頁の花▽ 櫻子

花材 山芍薬(牡丹科)

撫子(撫子科)

紅羊歯(雄羊歯科)

花器 陶鉢

ヤマシヤクヤクは山の奥深くで白く輝く宝石のような花だ。そっと薄紅色のナデシコを添えた。





好きな器

△3頁の花▽ 健一郎

花材 黒蠟梅 (蠟梅科)

透かし百合 (百合科)

花器 耳付陶花瓶

十三世家元〜十五世家元が集めた花器は、全部合わせると500程あるのではないだろうか。それぞれの代の家元には特色があり、自ずと使う花器の種類も違ってくる。自分の欲しい花器もあるが、今は家にあるものを使っている。どうも私が惹かれる花器は十三世のものを選ぶ傾向があるみたいだ。原始的な雰囲気をもとった不思議なオーラが堪らなく気に入っている。花と組み合わせるとまたいい表情になる。クロロウバイの暴れ枝は納得いくように入ると気持ちがいい。



健一郎のインスタグラム ken161022

動画で花の生け方を解説しています。ぜひ覗いてみてください。

スマホのカメラで読取り↓





真っ赤なバラ

△4頁の花▽ 仙溪

花材 コアラファン(蚊帳吊草科)

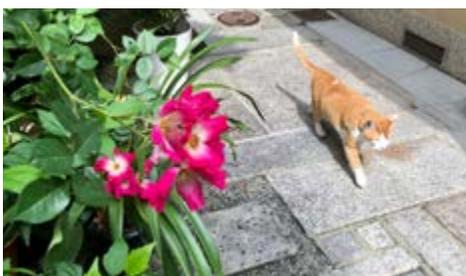
薔薇(薔薇科)

アリウム・シューベルティ

(百貝科)

花器 ガラス花瓶

オーストラリア原産のコアラファンと中東原産のアリウム・シューベルティを赤いバラが繋ぐ。世界をつなぐ熱き心。



綺麗になった石畳を歩くレモンちゃんとバラ。

『無限つてなんだろう』

健二郎

祖父とはよく考えた。無限つてなんだろう。宇宙つてなんだろう。死つてなんだろう。その中でも無限について考えている時は、ワクワクした。祖父は幼いころに夢で見た無限の針山に囲まれた時の恐怖が忘れられないとよく話してくれた。私はなぜその針の山が無限だと分かったのかという疑問を持ちながら話を聞いていた。その疑問をぶつけると祖父は嬉しそうに話を広げてくれる。

無限とは？まず数を数えてみる。一、十、百、千、万・・・無量大数。今は全て言えないが当時はよく位を数えていた。なぜ数字はここで終わるのだろう、続きが知りたくなる。9という数字をいくら並べても無限には到底追いつけそうにない。人には必要がないのだろうか。数字では表せない。

小学生の頃に太陽の事が気になり調べていた。そこで太陽は2千矜トンの体重だという事を知り、銀河系がたたくさんある事を知り、宇宙の始まりであるビッグバンを知った。ビッグバンの説によれば今も宇宙は無限に広がり続けているらしい。どこを広がっているのかも、どこに向かつて広がっているのかもチンプンカンプンだ。

私は、夢ではなく、現実で無限を感じていた。私が祖父の家に住むようになって間もない頃、夜の1人

のトイレが怖かった。階段を降り、廊下を渡ってトイレに行くのだが、廊下は途中で切れて一度敷瓦の上を歩くことになる。その時に箕子の上を通るのが怖かった。箕子の奥に見える床下の空洞が怖かったのである。何もかもを吸い込んでしまいたい。何もうろ黒色は忘れられない。何もかもを吸い込んでしまおう黒色に私は無限を感じていたようである。不気味であり、この世のものとは思えなかつた。日中に比べ、視覚情報が極端に制限されるからだろうか。日本家屋独特の不気味さといまって怖さが増幅された。今ではその箕子は取り外され、離れた廊下は一つにつながってスロープになり、昔の雰囲気はなくなってしまう。

無限つて何だろう。人類の頭を悩ませているこの大問題を2人で解決する事はできなかった。分からないという事が分かった。大発見である。分からないという事が分かるまでは、なんで考えていたのか、ついには何を考えていたか分からなくなる始末で、頭がぼーっとしてなんだか退屈になる。

無限のなかにはワクワクと退屈恐怖があるようだ。無限は考え始めるときにはワクワクし、考えると退

屈、自分ごとになると恐怖を感じるらしい。

分からないという事が分かってからは、何が分かっていないのかを確認するようにになった。無限がわからないので、何ががあるのか考えた。まず私はここにいる。私がここにいるという証拠は？自分だと認知している脳が自分なのだろうか。なぜ自分は脳であると自分には分かるのだろうか。本当に自分は存在しているのかと不安になる。ほら、また頭がぼーっとしてきた。

知らないことは不安である。認知症の人はわからないから怖いのかも分らない。覚えがない場所になぜ自分がいるか。想像してみたい。目を覚ましたら知らない人だらけの世界を。娘が中学校から帰ってくるはずだったのにその娘は孫を連れて面会に来ている。娘がいうにはもうすぐ100歳になるらしい。さつきお昼ご飯を食べたはずなのに、お昼ご飯を配ってくれるお兄さんがいれば不審にも思うだろう。その状況を受け入れられずに人に原因を求め、怒る人。自分の中に原因を探し、解決しようとする人がいる。どちらにも根本には知らないことへの不安がある。私が想像するに無限の不安な

かもしれない。ものを考えようにも自分で考えている自分と現実の差が大きすぎるのだ。相手の心の不安を

想像する事ができれば、怒っている人と向き合うのではなく、不安な人と向き合うことになるので会話への態度も違ってくる。

分からないものは怖い。地震、台風、洪水など自然現象にも怖いものが沢山ある。人間が理解できていないものは怖いものである。今でこそ科学がメカニズムを説明してくれるものもあるが、まだまだ未知のものも多い。分からないものが突然出てくると、大慌てである。何とかして原因をつきとめよとしたが分からない。分からないことは恐怖である。物事を筋道立てて説明できない不思議な物事を説明するのに、地震のナマズ、風神、妖怪、宗教などが生まれたわけだ。これらの中に安らぎを見つけることは、自分の恐れと向き合う方法の一つである。

たとえば死後に起こることや、死後の世界など、恐れに関する質問に答えるための何かを持っていると、それは死への恐れへの助けになる。答えを持っていることは、その人の中では知っているということになる。自分の恐れを無視するのではなく、向き合える程度にぼかしを入れたものである。だが私は、その場に自分が身を置き、体験しなければ納得できない。言葉で表現できてしまえるものだと、到底思えないからだ。

怖いには2種類ある。生命の存在が揺るがされたときの恐怖。もう一つの恐怖は自らが頭の中で思考によって創り出される恐怖である。恐怖によって心拍数が増加し、血の気が引き、震えや発汗などといった反応を体は示す。それに引き換え、思考により感じる恐怖は、生命の危機とは少し遠いためか、相当の物でなければ感じられないのではないだろうか。考えることにより、恐怖を感じられるという事は、考えられる生物にしかできない事である。

考える事で怖くなれるのである。これを私は警告であると考ええる。

ブジャデ

健二郎

先月の私の文中に「ブジャデ」というのがあって、「デジャブ」の間違ひ？と思われた方も多かったのは、説明不足でしたので補足します。

「デジャブ」は既視感のことです。一度も体験したことがないのに、すでにどこかで体験したことのように感じるのですが、「ブジャデ」はその反対のことを表す造語です。何度も体験しているのに初めてのよう新鮮に感じることを指します。できるだけブジャデを意識して、色んな事に気づきたいと思います。

絵巻に見る挿花

仙溪

『慕婦絵詞』と『春日権現験記絵』で、鎌倉末から室町初期のおもに仏門での挿花の様子を見てきたが、もう少し時代を遡ってみよう。



出典：『続日本の絵巻8華嚴宗祖師絵伝』中央公論社

老若の僧たちに金剛三昧経について講義する元暁（617～686）。後方の壇には青いガラスの瓶に花が挿してあり隣に香炉が置かれている。仏の崇高な教えに浸り、真理を深く悟るための道案内として、香を焚き花瓶に花を挿しているように感じられる。



出典：『続日本の絵巻8華嚴宗祖師絵伝』中央公論社

新羅の学僧、義湘（625～702）は船で唐へ渡り、長安をめざす。ここには義湘が途中で立ち寄った長者の屋敷の様子が描かれている。深く仏教に帰依しているのだろう、机には經典が置かれている。侍女が花を挿した花瓶を持っているが、花瓶の口の形が花の形をしているところは、図③の花瓶と同じである。この絵の右には、長者の娘・善妙が、義湘に恋慕の思いを告げるところが描かれている。

絵巻では、恋心を深い信仰心に昇華させた善妙が、自ら海に身を投げて龍となり、新羅へ戻る義湘の船を守るというドラマチックな場面がつづく。

『華嚴宗祖師絵伝』

鎌倉初期の建永元年（1206）に京都梶尾の地に高山寺を建てた明恵上人高弁（1173～1232）が華嚴宗を広めたい一心で描いたとされる。朝鮮半島、新羅国の華嚴宗の祖師である義湘と元暁の物語絵巻である。

ここにも異国のことではあるが、寺院における挿花の様子が窺える。

図①には青いガラス瓶に花が挿されており、その横に香炉も見える。場所は新羅。

図②の場面は中国（唐）のとある港町にある長者の屋敷。女主人の前に侍女が花を挿した花瓶を指し出す。机には盆石と香炉も置かれている。

図③は立派なお堂での講説に人々が集まる場面。お堂の正面に蓮の花と葉が挿された一对の花瓶と香炉が置かれ、女人が供花を捧げ持っている。場所は新羅の浮石山寺。

明恵上人自身は唐への留学を果たせなかったため、上人が実際に見てきたわけでは無いが、これだけの描写の元となる知識は持ち合わせていたと推察する。少なくとも明恵上人の時代の彼の地の描写と違って見ても良いだろう。

古代の中国や朝鮮において、挿花がどの様で



出典：『続日本の絵巻8 華嚴宗祖師絵伝』中央公論社

唐で学び、新羅に戻った義湘が、浮石山寺にとどまって華嚴の教えを広めるため講説している場面。ハスの花と葉が幾本も挿された花瓶は白磁だろうか。他にも供えるための切り花を手を持つ女性が二人。一方は籠のようで、一方はガラスの鉢に見える。華嚴経は4世紀頃インドでまとめられ、その後中国の杜順（557～641）が華嚴宗を開いた。日本では義湘たちの後に唐で学んだ新羅の僧、審祥（生没不明）が736年に招かれて華嚴経の講義をし、感動した聖武天皇は東大寺に大仏を造ることになる。今も東大寺は華嚴宗を伝えている。そもそも華嚴という名前には「花で荘厳された教え」という意味が込められている。



出典：<https://benrido.co.jp/wp-content/uploads/2014/07/nenbutu.gif>

バショウの葉を光背に、釈迦如来のポーズでハスの葉にカエルが座る。前机の花瓶に3本のハスの花が立てられている。ガラス瓶だろうか。茎が透けているようにも見える。一つ気になるのは、前後の場面を見ても香炉が描かれていないこと。蓮の花の香りが代わりになるという心だろうか。又はこのような形式もあったのか。ひょっとして型にこだわり心を忘れることへの諷刺か。識者の解説をお願いしたい。



出典：『日本の絵巻6 鳥獣人物戯画』中央公論社

カエルがハスの蕾をうやうやしく捧げ持つ。猿僧正への供物だろうか。ハスの茎には念珠が掛けられている。仏教においてハスの花は特別な存在なのだ。

あったかを知ることは、いけばなが生まれる背景を想像する上での手がかりになるだろう。室町時代の「立て花」誕生の瞬間に思いを馳せるには、祈りの場における花について、そのルーツを知っておきたい。

『鳥獣人物戯画』

さて、明恵上人が建てた高山寺には『鳥獣人物戯画』も流転の末に伝わっている。蛙や兎が滑稽に描かれた絵巻だが、ここにも挿花の描写が見える(図④)。

『鳥獣人物戯画』は鳥羽僧正覚猷(1053~1140)ほか数名によって平安時代末期から鎌倉時代初期に描かれたとされている。平安末期には、仏の前に蓮の花を挿した花瓶

を供えることが仏事の決まり事であったことが想像できる。

6世紀に仏教が伝えられて後、多くの僧が仏の教えを学びに大陸を訪れ、様々な文化を持ち帰っている。それらは少しずつ根付き、又すこしずつ変化もしただろうが、元々の大陸での挿花がどんなものだったのか、もう少し探ってみたい。



タニワタリ
デンファレ

△9頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 谷渡り(茶笥羊歯科)

デンファレ(蘭科)

花器 陶水盤

タニワタリは大中小と、大きさをとりまぜて使うことで生花になる。ただし、葉が大きくて足元も太くなるので、一種でいけても、よほど特徴のある器であれば面白い生花となるだろうが、普通の器にいけても一種だけでは万年青や葉蘭のようなキリッとした風格を表現しにくい。家でいけて飾るなら、南国の鮮やかなランと株分けにするといいたろう。ランの色とタニワタリの緑が互いに引き立て合ってくれる。少し大きめの水盤がいい。





近況

仙溪

4月から稽古をお休みにしていましたが、5月は花にプリントを添えてお届けし、自宅で自主稽古することに挑戦していただいています。つけた花の写真をメールや手紙で送ってもらい批評をお返しするのですが、皆さん初めての試みを新鮮な感じで楽しんで下さっています。

コロナ自粛中に家族総出で家の路地の石を洗いました。黒い小石（那智黒）は表面は綺麗でも、その下は泥がいつぱい。すべての小石を集めて溝をタワシで磨き、小石はバケツでピカピカに洗って元にもどしました。苦勞したあとの清々しさと充実感を味わっています。

雲のように

△10頁の花▽ 仙溪

花材

茴香（芹科）

薔薇（薔薇科）

スモーク・グラス（稲科）

花器

ガラス花瓶
（スウェーデン製）

バラの名前はドルテエヴィータ。直訳は「甘い生活」だが、「幸せな日々」とも。優しい雲のようにふんわりつけた。





野山の風情

〓11頁の花〓 仙溪

花材 竹島百合(百合科)

鉄線(金鳳花科)

釣鐘鉄線(金鳳花科)

花器 陶花瓶(宇野三吾作)

タケシマユリは竹島で咲いていた百合なので名付けられた。領土問題になっている竹島ではなく、韓国の東140キロにある火山島で、韓国の名をウルルンド(鬱陵島^{ウルリョンドウ})という。今は韓国の領土で、野生植物の宝庫だそうだ。

タケシマユリには独特の個性がある。ラグビーボールのような蕾。鮮やかな色の肉厚の花弁。輪生する葉。一本でも絵になってくれる花だが、一本でそのままいけるには丈が長い。

とり合わせる相手に悩む花だが、野山の風情を感じる花材がよく似合う。枝ならナツハゼやユキヤナギ。花なら作例のようにテツセンを多種で合わせるのも意外によく合う。

花の相性は実際合わせてみないとわからない。





出逢い花 (39) 仙溪

笹百合 (百合科)

紫陽花 (紫陽花科)

花器 ガラス花瓶

(イストラエル製)

コロナウィルスの影響で各地の行事が中止になっている。京都では葵祭の行列も祇園祭の巡行もなくなった。6月の三枝祭りはあるだろうか。奈良の三輪山に咲く笹百合を集めて罇と缶と呼ばれる酒樽を飾り、神前に供える疫病除けの祭典で、大神社の摂社、率川神社で行われる。平安時代の律令の注釈書『令義解』にも記されている歴史ある神事だ。おや、罇や缶という古代の酒樽に花を飾る？なにやらいけばなのルーツを感じるではないか。私たちが花をいける背景には長い歴史がある。先人達が花へ託した思いを共有したい。写真の青い大理石模様のガラス花瓶。手からするっとすべって落ちてしまいそうなほど軽くて薄い。でも水を入れるとしっかり立ってくれるので、一輪挿しや出逢い花の器にぴったりだ。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021年
6月号
No.696

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





初夏を生ける

△3頁の花▽ 健一郎

花材 いろは紅葉いろはもみぢ

(楓科・ムクロジ科)
芍薬しやくやく(牡丹科)

花器 陶花瓶

青楓。夏の風物詩である。遅咲きの桜が出る頃に葉を少しずつ硬くする。拳こぶしを握りしめた状態から少しずつ手を広げていく。大ぶりの豪華な芍薬と取り合わせた。返り枝で楓は撓ためがきかないため素直にそのまま立てて、幹を見せず葉をよく見せた。光に照らされると葉の良さが際立つ。芍薬の葉、楓の葉どちらもみずみずしく沢山の緑の中に花が浮き立っているかのようだ。水色の背景が表現に広がりを持たせてくれている。

横から見た奥行き





山野草の立花

△ 4頁の花 ▽ 仙溪

花型 除真立花のきしんりつか

花材 京鹿の子きょうかのこ (薔薇科)
夏櫨なつはぜ (躑躅科)

山紫陽花やまあじさい (紫陽花科)

下野しもりの (薔薇科)
晒木しやれぼく

花器 黒釉陶花瓶

季節の草花を主材にした立花。夏山で出逢った草木の記憶をたどって立てた。

ナツハゼをいけるととき、登山の途中で実を見つけて食べたことを思い出す。酸っぱさが疲れを吹き飛ばしてくれた。尾根筋の風通しのいい心地よい場所だったのを覚えている。

さまざまな木々が山歩きを励ましてくれる。そして奥山の開けた場所に咲く花たちに感動する。

そんな気分が伝わりますように。





裏白の木 芍薬

△5頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

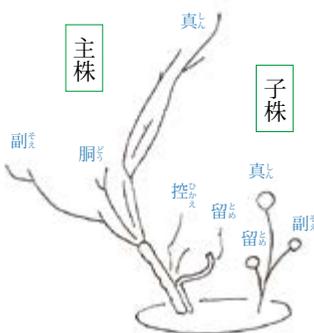
花材 裏白の木(薔薇科)

芍薬(牡丹科)

花器 松樹天目深鉢

(木村盛康作)

鎌倉時代、中国の天目山から
もたらされた黒褐色の茶碗が「天
目茶碗」と呼ばれた。窯変天目
や油滴天目が有名だが、京都の
陶芸家、木村盛康氏は苦心の末
に松の木肌のような模様を生み
出し「松樹天目」と名付けられた。
その松樹天目の大鉢に、山の
木と里の花を株分けでいける。
花たちも気持ちよさそうだ。平
然と草木の命を受け止めてくれ
る懐の深い器。私に心地よい緊
張を与えてくれる、ここ一番の
大切な存在。いい器だ。





大山蓮華を生ける

△6頁の花▽ 健一郎

花材 大山蓮華(木蓮科)

鉄線(金鳳花科)

花器 青瓷花瓶(清水卯一作)

緊張感のあるお花を生けるときは相應の器で生けたい。飾ると部屋の香りが大山蓮華に支配された。家の中で広がる香りは人を惹きつける。香りが弱くなると花は散る。ほんの数日であったが楽しませてもらった。

大峰山おおのみねに自生しているので季節になるとどんな景色が広がっているのだろう。楽しみである。

鉄線の濃い紫が大山蓮華に対していささか強い気がするが、お互いの良さが際立つ。

横から見た奥行き





レモンちゃんと白いダリア。きれいだな。



花器 陶花瓶(宮下善爾作)
 ナツハゼはスノキ属。葉や実が酸っぱい木なのでスノキ。ブルーベリーもスノキ属だ。スノキ、ウスノキ、ナツハゼ、オオバスノキ等が夏櫨の名前で切り枝になる。ユリとナデシコを合わせて自然調にいけた。

酢すの木のき、夏櫨なつはげ。

△7頁の花▽ 櫻子

花材 夏櫨なつはげ(躑躅科)

鉄砲百合てつぱうりく(百合科)

撫子なごし(撫子科)

認知症対応型共同生活介護（グループホーム）での生活が楽しくて仕方がない。そんな日常でたくさんの発見をよくする。

笑いは生きる活力であるのではないかとつくづく思う。笑うことで気分が晴れ、何かでちよつとした笑いでもいい。利用者さんと生活をして2年ほどになるが笑いを無意識的に仕掛けてしまうようになってしまっている。

記憶が繋がらず、目の前で不可解なことが起きる世界に生きている利用者さんはいったいどんな気持ちでいるんだろう。僕には未知の世界だが、それでも想像することはできる。自分の時間だけが止まっていて周りは動いている状況である。講義中に寝ていたところを、先生に「この問題を解いてみる」と言われるようなものである。説明を聞いていなかったのに解ける

はずもない。だが周りの人たちは確かに話を理解している。僕なら何だかわからないが周りに話だけ合わせておき、間に合わない現実には自分を取り繕うだろう。そんな不安な人に安心感を持つていてほしい。なんだか、ここにいたら落ち着くな。悪くはないな。と感ぜてもらえることを目標にしている。

笑いをつくるためにはまず土台が必要だ。安心感である。つまり笑顔だ。笑顔は敵意がない事を相手に示し共感を示す。多民族国家のアメリカではエレベーターなどで顔を合わせた時「Hi」と声を出して笑顔を作るのは素性の分からない相手の警戒心を解き、その場を安全な空気にするためである。これは故意に安心感をつくる笑顔である。自分の笑顔が良い笑顔だと相手の笑顔も良くなる。安心感が笑いの根底をつくる。緊張していたり、怯えていると上手く笑えないことを考えると何となく想像できる。無理して作った笑顔が相手に伝わると不信感に変わってしまう。

安心感がないと笑いに繋がらないのは不審者にくすぐられても笑いに繋がらない事を考えると思像しやすい。

まず安心感をつくる。そうすると僕がそばにいる事を許される。そして次は安心感を笑いに変えていく。

笑いには大きく分けて2種類ある。言葉の笑いと動作の笑いである。言葉による笑いで笑うにはある程度の認知能力が残されていないと難しい。なので主に動きによる笑いに言葉を少し付け足すような形で笑いを作っていく。

まず初めに、笑いを共有したい相手が、会話の中で使う言葉に注目する。人は言葉によつて思考する。言葉がその人なのだ。言葉はその人の世界の区切り方である。その人の世界がどんな世界で生きていくかの参考になる。そしてその人の興味関心に気がつく。もちろん完全にその人を解ることはできないが側に寄るイメージだ。相手の理解し

やすい言葉を相手の思っている意味で使う。この際、言葉の本当の意味はどうでも良い。私も難しい話をされたら分からないし、緊張する。まず相手の使う言葉や語彙をある程度把握し、その人の世界に入り込む。利用者さんの世界は大雑把で物と物の区切りが臆気（おそげ）でぼやぼやしている。その人に寄り添うとその人は自然と笑う。そして事あるごとにおどけて冗談を言い合っている。

動きの笑いは喜劇映画のチャップリンをイメージするとわかりやすいだろう。動きの不調和が笑いを生む。コミカルな動きで不調和を作り出す。例えば、介護をしていた職員が、次の瞬間に車椅子に乗って現れたら、さつきまでの行動との不調和と安心感があいまつて笑いにつながる。

ここ最近、笑い方が変わった。引き笑いをするようになった。菜月に指摘されてきがついたのだが、それは多分、無意識で相手に笑っていますというサインを誇張した形な

のでは無いだろうか？

ただ毎日が笑うだけで終わることを望んでいるわけでもない。不安な気持ちを抑えつけて表出させないわけではない。ずっと笑っている世界も不気味だろう。何もない隙間の時間、瞬間、瞬間の何でもない時間を笑顔にしたい。

道路を歩きすれ違う人のマスクで隠れているが、その人の笑う顔を想像する事がある。気難しそうな人も、怖そうな人も笑うといい顔になる。常に自分を整えているとある程度の余裕ができてきた。自分で整えているつもりだが、身近な人が整えてくれているのに気がついていないだけかもしれないが。

グループホームで働くようになってから人が好きになつた。悪いところも良いところも全部ひっくりめたありのままのその人が好きだ。そして、その人はその人らしく生き生きとしている事が気持ちよ



梅雨空のパラソル

△表紙の花▽ 桜子

花材 ベル鉄線(てつせん) (金鳳花科)

穂栗苔(いかりすげ) (蚊帳吊草科)

花器 ガラス花器 (ベネチア)

小さくてもキリリとした姿で咲くベル鉄線。大輪の鉄線にも負けないくらいの存在感がある。ガラス器に付けて庭で育てたイガグリスゲを添えると優しい洋風の雰囲気。

きらきら光る水たまり。赤いラインシューズをはいた幼な子がパラソルを持って遊ぶ風にも見えて。

横から見た奥行き



生命を生み出す豊穣の壺 プルナ・カラサ

仙溪

花と器の図像を時代を遡^{さかのぼ}って探すうち、古代インドのプルナ・カラサ（満瓶）にたどり着いた。それはどうやら宇宙、生命の母胎のイメージが込められた、エネルギーに満ちあふれるもののようにある。仏教が起り、釈迦の教えを伝え継ぐ



サーンチーの第2仏塔。石の玉垣に様々な文様が彫られている。

出展：①⑱ <https://www.greatmirror.com/index.cfm?navid=748>

ために遺骨を納めた仏塔（ストウパ）が各地につくられたが、仏塔は釈迦の墓としてだけではなく、迷いの世界を抜け出した悟りの境地そのものであり、万物が生ずる源（卵）と同一視されていたようだ。ゆえにその装飾には溢れ出る生命を表したものが多い。そしてその中でも特に大切なのが壺からハスが生まれ出る文様、プルナ・カラサであった。

紀元前2世紀の仏塔の装飾文様を閲覧できる。生き生きとした動物や植物が石に刻まれている。どの文様も躍動感があり、デザイン的にも素晴らしいので一部を転載させていただいた。プルナ・カラサ（③④⑤⑱）は他にも8つ紹介されていた。特に大切な文様なのだろう。壺から命が湧き出る。命の水が湧き出る。プルナ・カラサにはそんなイメージが込められている。

紀元前3世紀にアショーカ王が建てた仏塔が中央インドのサーンチーに現存している。紀元前2世紀以降に増築や玉垣・塔門が追加された。図②～⑱は第2仏塔の玉垣の装飾文様の一部。

③④⑤⑱は壺からハスが生まれ出る文様でプルナ・カラサ（満瓶）と呼ばれる。蕾、開花、葉が彫られ、⑤には鳥も。

②は亀の口からハスが出ているが、左ページの絵②とイメージが重なる。よく見ると熱帯スイレンも混じっているように見える。②の青いスイレンの球根はまるで壺のようだ。

⑥はマカラ（インド神話に登場する怪魚）。⑦は象。⑧は孔雀。⑨は羽根のあるライオンか。

⑩から⑱はハスの様々な文様。デザインセンス抜群だ。⑮はハスの周りを2種の蔓が蛇のように絡み合う。⑯のハスの周りはトリシューラと呼ばれる三叉文様。三宝（仏、法、僧）を表す。

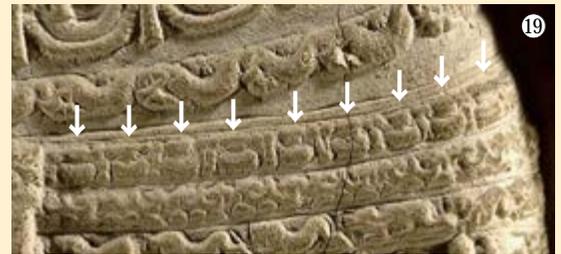
出展：②～⑱ https://vmis.in/ArchiveCategories/collection_by_category/1049



アショーカ王石柱頭部
(サーンチー博物館)

写真⑰は紀元前3世紀に仏教に帰依したアショーカ王が各地に建てた大きな石柱の先端部で、獅子の下にあるのはハスの花（開花して反り返る姿）とされているが、水が壺から溢れ出ている様にも見える。だとすれば、これもプルナ・カラサから湧き出る水が漲る生命を支え養うというメッセージが込められているのではないだろうか。王が感銘を受けた釈迦の教えを、湧き出る水で表現したのでは。さて古代の仏塔にもどうだろう。表面の装

飾は剥がれているが、その装飾石板(⑱)で仏塔の様子がわかる。そこにはプルナ・カラサがぐるりと取り巻き(⑲)、中央下にも一対のプルナ・カラサが見える(⑳)。実際の仏塔入口にも石のプルナ・カラサが置かれていたのではないだろうか。そして気がついた。以前紹介した東大寺大仏開眼供養の一対の供花もプルナ・カラサなのではないだろうか(㉔)。その時導師を務めたのは来日中のインド僧・菩提僣那(ボーディセーナ)である。彼の指導で器を作りハスの造花を立てて一対のプルナ・カラサができればいい。虚舎那仏の前に置かれ、大仏殿に命を吹き込む。生命を生み出す水が満たされた豊穡の壺から花が咲き散華するイメージだ。あくまでも私の想像である。



⑱インド南部アマラーヴァティー出土の装飾石板で実際の仏塔が想像できる。部分拡大するとあちらこちらにプルナ・カラサが(⑲⑳)。

出展：⑱⑲⑳ https://www.britishmuseum.org/collection/object/A_1880-0709-79 (大英博物館の公式サイト)



供花のルーツを探していて古代インドのプルナ・カラサに行き着いた。それは溢れ出る生命の象徴としての壺でありハスであった。

㉔熱帯睡蓮(エジプトロータス) 出展：「花の王国1 園芸植物」荒俣宏著/平凡社。㉔サーンチー第2仏塔の玉垣装飾。㉔アマラーヴァティー出土の仏塔装飾石板の部分。出展：<https://vmis.in/ArchiveCategories/gallery?search=amaravati> ㉔「東大寺大仏縁起絵巻」大仏開眼供養の供花。出典：<https://www.wikiwand.com/ja/東大寺虚舎那仏像>



ライラックの季節

△12頁の花▽ 櫻子

花材 ライラック(木犀科)

薔薇(薔薇科)

ユーカリ(フトモモ科)

花器 カットガラスコンポート

待ち遠しいライラックの花が咲く季節。日本では北海道や信州の高原で育ち、ヨーロッパでは街路樹としてもよく植えられている。

甘い香りを持ちハート型の葉とたつぷりとした房咲きに咲く華やかで可愛い花、紫やピンク、白のおしゃれな色。大好きな花。6月だけの限定品。

切り花として届くライラックがもう少し日持ちしてくれれば嬉しいのだが。

出来る限りの水あげをして深みずの水のパンチボウルにいける。きれいなバラと取り合わせた。

ライラックが機嫌を損ねないよう気分良く咲いてもらいたいと願う。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022年
6月号
No. 708

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





八角蓮の花

△表紙の花▽ 健一郎

花材 金鎖(豆科)
八角蓮(目木科)
花器 青白花器(吉川充作)

虫が好みそうな香り、人が苦手とする匂いがした。足元を見ると八角蓮の葉が光っている。よく見てみるとお花が咲いていた。花の珍しさとその匂いで人を惹きつけていた。八角蓮の相手を探しているとお花屋さんからキンクサリがありますとのこと。よく合う取り合わせだと思っている。格調高く仕上がった。獣足の花器はインド系の神様を想起させる。



流木を使う

△2頁の花▽ 仙溪

花材 裏白の木(薔薇科)
躑躅(躑躅科)
鉄線2色(金鳳花科)
流木



花器 銅立花瓶

流木に足をつけて器にさしておき、季節の木や花を加えて自然な景色をつくってみた。流木の重みにつりあつた安定の良い銅器にいける。



たっぷりと

△3頁の花▽ 櫻子

花材 花菖蒲はなしょうぶ (菖蒲科)
撫子なでしこ (撫子科)

花器 カットガラス鉢

縁あつて沢山の花菖蒲がやってきたので、大きなガラス鉢にたっぷりといけて玄関に飾った。四方から見えることを意識していけている。どの花も一斉に咲いてくれて感謝。





べつこうまさき
龜甲柢木の生花

△4頁の花▽ 仙溪

花型 行型
 花材 べつこうまさき
 亀甲柢木
 花器 煤竹竹筒
すすだけ

マサキは常緑低木で日本列島に広く分布している。葉の大小、葉色やその濃淡、斑入りなどいくつかの品種がある。

マサキ、オオサカベッコウマサキ、キンマサキ、ナカフキンマサキ、ギンマサキ、オウゴンマサキなどが緑化植物として公園に植えられたり生け垣に使われている。

いけばなではクロヒメマサキやベッコウマサキを生花にしているが、ベッコウマサキは明るい緑と黄色が美しいので、生花にいった残り枝を盛花や投入、一輪挿しに利用できる。

写真のベッコウマサキは伸びた細枝を生かしてつけたが、手にした枝にボリュームがあるなら、それを生かせばいい。





ピレアホルン

△5頁の花▽ 仙溪

花型 真型 二種挿し

花材 鉄砲百合(百合科)

スプレー薔薇(ばら 薔薇科)

花器 陶水盤(伊藤典哲作)

4月に稽古の見本でいけたものだが、ユリの季節の生花として参考にかけておく。

テッポウユリを真、見越、真囲、副、胴に立て、スプレーバラを留と控に加えた。

ユリはピレアホルンという品種で、よく締まった葉がびっしりつき、小ぶりの花はとても良い香りがした。ユリもバラも撓めずにいけている。剣山にさす位置を工夫して、足元をできるだけ細く見せている。

蕾の時の姿は先月号のレモンちゃんの写真で見てもらえる。花が咲きそろったあと茶色く枯れるまで、葉はずっと美しかった。





一輪挿し

△6頁の花▽ 健一郎

花材 小鬼百合（百合科）

金虎の尾（金虎の尾科）

花器 陶花瓶（崔龍熙作）

お花屋さんには茶花用に鉢で珍しい花が置いてある。それを眺めているのが好きだが、生けるとなると相手を探すのが難しい。今回似合いの2鉢を見つけた。いい季節である。魅せたいものが写っている。



花の勢い

△7頁の花▽ 健一郎

花材 黄素馨（木犀科）

アリウム・ギガンチウム（百合科）

ム（百合科）

紅花（菊科）

花器 陶花瓶

ギガンチウムと紅花の花の形



に目がいく。似た形の花を取り
合わせると形の違いに目がいか
なくなる。その質感の違いをみ
ることができないだろうか。似
た植物による調和ではなく競い
合っている様に私は感じてい
る。ベニバナとソケイで生ける
予定だったがギガンチウムが入
ると勢いが増した。夏の匂いが
する。



レモンが注意してくれてるの
か、花にいたずらしなくなっ
てきたメイちゃんです。



草花砂之物草

花伝書を見る

砂の物 檜扇のきしん除真

「草花砂之物草」

中野氏（富春軒・初版）

檜扇ひおうぎ 芦あし 杜若かまつばた 仙翁花せんおう 百合

擬宝珠ぎぼし 小菊 桔梗ききょう

（立花時勢粧・下 秘曲の図）

立花時勢粧の百十八ある絵図の一番最後、トリを飾る一作。見開きで掲載されているので、生き生きとした躍動感を感じ取ることができる。

この絵図の主役は草花で、植物の澁刺はつちとした生命力を表現しようとした富春軒仙溪の心が読みとれる。

右へ大きく弧を描きながら伸びる葉は何の葉だろう。ススキのようにも見えるが、葉の下にやはり長く伸びた茎の先にカキツバタの蕾が描かれていることからすると、この長い

葉もカキツバタの葉ではないだろうか。

池のほとりで雨風に倒れたカキツバタの花と葉が、思いのほか長く伸びていて、それをなんとか生かしたい一心でこの砂の物を立てたのだろう。厳しい環境にあらがう植物の姿を美しいと感じ、魅了されていたのだと思う。

「二瓶の内に二枝風流なれば、ほかこれにあらそいて働きあり。」と「砂の物草の花形」で述べている。

普通は上に伸びる葉が水面を飛び越えんばかりに横へ伸びる。その姿にヒオウギやユリが絶妙なバランスで配されている。左下に横倒しに育ったユリがグイッと上を向いている。よくこんな咲き方を見つけてきたものと感心する。砂鉢すなばちの装飾までが渾然こんぜん一体となつている。

仙溪



中野氏



『義祖母との散歩』

健一郎

隠居して山に暮らしたいとふとした時に思う。隠居生活の先輩である祖父のお宅に遊びにいった。山に囲まれた家から見下ろすと川が流れている。楓が目を引く。その足元には躑躅が咲いており、大きな台風が来る前までは藤の花が一面に咲いていたそう。ゆつたりと川の音が生活の中にある。山の香りを楽しんでいると、川の上流へ向かうよう、カワセミが驚くほどの速度で通り過ぎた。義祖母によく似たように遊びに来るそう。昼から肉が大好きな義祖母と競うようにすぎ焼きを食べながらウトウトと昼寝。私と義祖母は山へ散歩する。数十秒歩けば森の中。外来種の植物を薙ぎ倒し、大きな枝、大きな石を端へどかしながら、やわらかく歩いていく。

その光景が後から見ている僕には、山を整えているように見えた。義祖母が山の一部であるようだ。鳥が蜜を運ぶがごとく自然な行為にみえた。それは僕が人だからであろうか。人でな

くともそう感じられるのではないかと感じている。自然と人の付き合いは長い。原始的であればあるほど濃密な付き合いがあった。家にお米が届く現場さえ見えない僕は自然との付き合いが非常に薄い例だろう。

都市において整えるとは自然物をなくすこと。人の住む街にすること。西洋の庭園に見られるような人工的な幾何学的な形を楽しむ庭園と比べ、日本の庭園は自然美を表す。いけばなにおいても、個人的に好きではないが、人の解釈にあてはめた幾何学的特徴に着目して楽しむ物と、植物そのものの魅力に着目して楽しむものがある。いずれの場合であってもそれは自然そのままではない。「手入れ」とはそういうことである。人は自然を看る(世話をする)事によって、返って自然を内から従わせる特徴を持つとも言える。

都市化された環境に慣れた人の原則として都市の中に自然を置くことを酷く嫌う。ここでの自然は手入れされていないありのままの野生である。昆虫がいると驚き、土が見えていると驚く。日常の髭剃りや、化粧も自然からの距離のとり方の一つで

ある。全てが人によって意識的に作られたものなかで生活している。テールマナーもこの視点で見ると面白い。街路樹や庭は人が看ることで管理されている。死体があると驚く。人の死は人から遠ざけられる。死ぬ前に病気で病院に隔離、亡くなると大急ぎで火葬場に持って行く。そんな環境で育った人達に死生観をもていつても妄想でしかない。

いけばなは芸術の中でも自然との関わりを思い出させてくれる。都市化する前のヒトに返す装置としてあり続けるのかもしれない。その時間が大切である。整理整頓された無機質な部屋に花を置くときの空気が変わる。生き物としての安心感がそこにある。

義祖母は立派な杉の木に手を合わせ拜む。僕も御所にお気に入りの楠木があるのだが、それは拜む対象ではなく、友達のような感覚でいる。木に登り、寝転ぶ。幼い頃は楓の木に登り、時を過ごしていた。圧倒されるような木を見つけると立ち尽くす。撫でたくなる時も、抱く時もある。記憶している初めの木登りはスイスのジュネーブでの

木登りだった。当時幼稚園児だった僕より年上の子供が登っているのを見て自分も登りたくなったのを覚えていた。一面、緑の芝生が整えられていて、木が綺麗に見えた。家の近くの公園では地面が砂だったからか、木の幹にジュネーブほどの魅力を感じなかったのだろうか。母いわく「あんたはサルみたいやつたで」と。よっぽど木登りが上手だったのだろう。上手な例えである。木と自分の関係は少しずつ変わっている。今でもよく木に登ることはあるが、ここ最近、手をかざしたり、抱くという行為が追加された。木を味わうというのだろうか話を聞く感覚に近い。触診とも似ているが少し違う。木と戯れ合う時もあれば共に時を過ごす時もある。拜む行為は木がある感謝の念がそうさせたのだろうか。

自分が歳を重ねた時、手を合わせられるような木が見つけれられるだろうか。木ではなく自分の在り方による物だと考えている。義祖母を見ていると感謝の気持ち体が表へ溢れ出ているようだ。まだまだ背中中は遠い。

義祖母は話しながら慣れた手つき、足取りで山の中へ入っ

ていく。妻の兄妹は幼少期この山で育ったそうである。オランウータンに似ているとは思っていたが合点がいった。最近、義祖母は口笛を吹きながら歩くそう。ウグイスの鳴き真似を2人でしながら川に沿って散歩。口笛の音にウグイスが返事してくれる。山の中には僕たち以外に人はいない。ある程度中へ入ると風合いが変わった鳴き声が聞こえた。「ここからは別の鳥の縄張りです。」と案内してくれた。モズの縄張りだ。様々な鳴き真似で遊んでくれる。モズは他の鳥の鳴き真似をする面白い鳥だ。僕が続いて鳴き真似をすると、また違う鳴き方で先導してくれる。様々な鳴き声で遊んだ。足元を見ると茶色のカエルが川の水を浴びながら羽虫を食べている。「昔は蛇がいてんけど。」と義祖母、なるほどこのカエルは平和に慣れていそうな体たらくなわけだ。整えられた道を除けばそこには自然が広がっていた。この自然の中では僕はとても定住できそうにはない。たまに遊びにくるくらいがちょうどいいのだろう。義祖母と僕の事をウグイスが家に帰るまで見送ってくれた。僕と自然の距離である。



大和学園 情報誌

クラブ・ドラッシュ 4月号

〜若き第一人者に教わる

京の伝統文化・いけばな

桑原専慶流次期家元

桑原健一 郎さん

「縁あってお会いする方とお花に向きあい、四季折々に咲く花々の魅力を活かしていれば、自分自身の魅力も磨かれるようです」

桑原専慶流の歴史は元禄時代（17世紀）に始まり、初代仙溪が当時の植物学を駆使した全8巻の著作は、華道の言葉が初めて記された資料とされています。そのような流祖から伝わる理知的な気風と自由闊達さを受け継ぎ、十六代（次期）仙溪となる立場の私ではありますが、日々「いけ

ばな」とはなにかを自問しているのも事実です。但し見つけた私論もあります。それは縁あってお会いする方々が安らいでくださるために、それは四季折々の野山に咲く花々が宿す「いのち」のために、お花の魅力を最大限に活かすことで、自分自身も活かすのが桑原専慶流の「いけばな」ではないかということ。また、そのような気持ちで花々に向きあっていたら人は自ずと磨かれるよう。「いけばな」に勤しみ、人としての魅力を増されたお弟子さんは少なくありません。これは他者への「おもてなし」を学び、自分を活かそうとされている大和学園の皆さんも同じでしょう。今後人も人としての魅力を高め続け、京の伝統文化でもある「おもてなし」の担い手となれる将来に向けて、私たちの「いけばな」が一助になることを願っています。（以上、誌面より転載）

学校法人大和学園は京都市内に4つの専門学校（調理師専門学校ほか）を設置するほか、生涯学習や産業支援事業も行っている。現在、華道の授業を櫻子副家元が担当し、健一郎次期家元も助手を務めている。



クルクマ

△12頁の花▽ 仙溪

花材 クルクマ・シャローム

(生姜科)

透かし百合(百合科)

モンステラ(里芋科)

花器 陶花器

クルクマは夏のいけばなに重宝する。インドやタイの熱帯の花なので暑さに強い。ハスの花のようなものからタテに長く積み重なったものまで種類も多い。花を守る白やピンクの包葉が美しい。子供を護るお母さんのような花だ。

